

# 偷盜

芥川龍之介

青空文庫



「お婆ば、猪熊のお婆ば。」

朱雀綾小路の辻で、じみな紺の水干に揉烏帽子をかけた、二十ばかりの、醜い、片

目の侍が、平骨の扇を上げて、通りかかりの老婆を呼びとめた。――

むし暑く夏霞のたなびいた空が、息をひそめたように、家々の上をおおいかぶさつ

た、七月のある日ざかりである。男の足をとめた辻には、枝のまばらな、ひよろ長い葉

柳が一本、このごろはやる疫病にでもかかったかと思う姿で、形ばかりの影を地の上に

落としているが、ここにさえ、その日にかわいた葉を動かそうという風はない。まして、

日の光に照りつけられた大路には、あまりの暑さにめげたせい、人通りも今はひとしき

りとだえて、たださつき通った牛車のわだちが長々とうねっているばかり、その車の輪

にひかれた、小さな蛇も、切れ口の肉を青ませながら、始めは尾をぴくぴくやっていたが、

いつか脂ぎった腹を上へ向けて、もう鱗一つ動かさないようになってしまった。どこもか

しこも、炎天のほこりを浴びたこの町の辻で、わずかに一滴の湿りを点じたものがあると

すれば、それはこの蛇ながむしの切れ口から出た、なまぐさい腐れ水ばかりであろう。

「おぼば。」

「……」

老婆は、あわただしくふり返った。見ると、年は六十ばかりであろう。垢あかじみた檜皮ひわだい色の帷かたびら子に、黄ばんだ髪の毛をたらして、尻しりの切れた藁草履わらぞうりをひきずりながら、長い蛙かえる股またの杖つえをついた、目の丸い、口の大きな、どこか墓ひきの顔を思わせる、卑しげな女である。

「おや、太郎さんか。」

日の光にむせるような声で、こう言うと、老婆は、杖をひきずりながら、二足三足あとへ帰って、まず口を切る前に、上くちびるをべろりとなめて見せた。

「何か用でもおありか。」

「いや、別に用じやない。」

片目は、うすいあばたのある顔に、しいて作つたらしい微笑をうかべながら、どこか無理のある声で、快活にこう言った。

「ただ、沙金しゃきんがこのごろは、どこにいるかと思つてな。」

「用のあるは、いつも娘ばかりさね。鳶とびが鷹たかを生んだおかげには。」

猪熊いのくまのぼばは、いやみらしく、くちびるをそらせながら、にやついた。

「用と言うほどの用じやないが、今夜の手はずも、まだ聞かないからな。」

「なに、手はずに変わりがあるものかね。集まるのは羅生門らしやうもん、刻限は亥いの上じやうこく刻——  
みんな昔から、きまつているとおりさ。」

老婆は、こう言つて、わるがしこそうに、じろじろ、左右をみまわしたが、人通りのないのに安心したのかまた、厚いくちびるをちよいとなめて、

「家内の様子は、たいてい娘が探つて来たそうだよ。それも、侍たちの中には、手のきくやつがいるまいという事さ。詳しい話は、今夜娘がするだろうがね。」

これを聞くと、太郎と言われた男は、日をよけた黄紙きがみの扇の下で、あざけるように、口をゆがめた。

「じゃ沙金しゃきんはまた、たれかあすこの侍とでも、懇意になったのだな。」

「なに、やつぱり販婦ひさぎめか何かになつて、行つたらしいよ。」

「なんになつて行つたつて、あいつの事だ。当てになるものか。」

「お前さんは、相変わらずうたぐり深いね。だから、娘にきらわれるのさ。やきもちにも、

ほどがあるよ。」

老婆は、鼻の先で笑いながら、杖つえを上げて、道ばたの蛇ながむしの死骸しかいを突つついた。いつのまにかたかつていた青蠅あおばえが、むらむらと立ったかと思うと、また元のように止まってしまふ。

「そんな事じゃ、しつかりしないと、次郎さんに取られてしまうよ。取られてもいいが、どうせそうなれば、ただじやすまないからね。おじいさんでさえ、それじゃ時々、目の色を変えるんだから、お前さんならなおさらだろうじやないか。」

「わかつているわな。」

相手は、顔をしかめながら、いまいましように、柳の根へつばを吐いた。

「それがなかなか、わからないんだよ。今でこそお前さんだって、そうやって、すましているが、娘とおじいさんとの仲をかぎつけた時には、まるで、気がふれたようだったじやないか。おじいさんだって、そうさ、あれで、もう少し気が強かろうものなら、すぐにお前さんと刃物三昧はものさんまいだわね。」

「そりやもう一年前まえの事だ。」

「何年前まえでも、同じ事だよ。一度した事は、三度するって言うじやないか。三度だけなら、

まだいいほうき。わたしなんぞは、この年まで、同じばかりを、何度したか、わかりやしないよ。」

こう言つて、老婆は、まばらな齒を出して、笑つた。

「冗談じゃない。——それより、今夜の相手は、曲がりなりにも、藤判官だ、手くばりはもうついたのか。」

太郎は、日にやけた顔に、いらだたしい色を浮かべながら、話頭を転じた。おりから、雲の峰が一つ、太陽の道に当たつたのであろう。あたりが然と、暗くなつた。その中に、ただ、蛇の死骸だけが、前よりもいつそう腹の脂を、ぎらつかせているのが見える。

「なんの、藤判官だといつて、高が青侍の四人や五人、わたしだって、昔とつたきねづかや。」

「ふん、おばばは、えらい勢いだな。そうして、こっちの人数は？」

「いつものとおり、男が二十三人。それにわたしと娘だけさ。阿濃は、あのからだだから、朱雀門に待つていて、もう事になようよ。」

「そう言えば、阿濃も、かれこれ臨月だつたな。」

太郎はまた、あざけるように口をゆがめた。それとほとんど同時に、雲の影が消えて、

往来はたちまち、元のように、目が痛むほど、明るくなる。——猪熊いのくまのばばも、腰をそらせて、ひとしきり東鴉あずまがらすのような笑い声を立てた。

「あの阿呆あほうをね。たれがまあ手をつけたんだか——もつとも、阿濃あこぎは次郎さんに、執しゅうし心しんだったが、まさかあの人でもなかるうよ。」

「親のせんぎはともかく、あのからだじゃ何かにつけて不便だろう。」

「そりや、どうにでもしかたはあるのだけれど、あれが不承知なのだから、困るわね。おかげで、仲間の者へ沙汰さたをするのも、わたし一人という始末しまさ。真木島まきのしまの十郎、関山せきやまの平六へいろく、高市たけちの多襄丸たじょうまると、まだこれから、三軒まわらなくっちゃ——おや、そう言えば、油を売っているうちに、もうかれこれ未ひつじになる。お前さんも、もうわたしのおしやべりには、聞き飽きたらう。」

蛙股かえるまたの杖つえは、こういうことばと共に動いた。

「が、沙金しゃきんは？」

この時、太郎のくちびるは、目に見えぬほど、かすかにひきつった。が、老婆は、これに気がつかなかったらしい。

「おおかた、きょうあたりは、猪熊のわたしの家うちで、昼寝でもしているだろうよ。きのう



までは、家うちにいなかったがね。」

片目は、じつと老婆を見た。そうして、それから、静かな声で、

「じゃ、いずれまた、日が暮れてから、会おう。」

「あいさ。それまでは、お前さんも、ゆつくり昼寝でもする事だよ。」

猪熊いのくまのばばは、口達者に答えながら、杖つえをひいて、歩きだした。綾小路あやのこうじを東へ、猿さるのような帷子かたびら姿が、藁草履わらぞうりの尻しりにほこりをあげて、日ざしにも恐れず、歩いてゆく。

——それを見送った侍は、汗のにじんだ額に、険しい色を動かしながら、もう一度、柳の根につばを吐くと、それからおもむろに、くびすをめぐらした。

二人の別れたあとには、例の蛇ながの死骸むしがいにたかった青蠅あおばえが、相変わらず日の光の中に、かすかな羽音を伝えながら、立つかと思うと、止まっている。……

## 二

猪熊のばばは、黄ばんだ髪かみの根に、じつとりと汗をにじませながら、足にかかる夏のほこりも払わずに、杖をつきつき歩いてゆく。――

通い慣れた道ではあるが、自分が若かった昔にくらべれば、どこもかしこも、うそのような変わり方である。自分が、まだ台盤所だいばんどころの婢女みずしをしていたころの事を思えば、——いや、思いがけない身分ちがいの男に、いどまれて、とうとう沙金しゃきんを生んだころの事を思えば、今の都は、名ばかりで、そのころのおもかげはほとんどない。昔は、牛車ぎっしゃの行きかいのしげかった道も、今はいたずらにあざみの花が、さびしく日だまりに、咲いているばかり、倒れかかった板垣いたがきの中には、無花果いちじゅくが青い実をつけて、人を恐れない鴉からすの群れは、昼も水のない池につどっている。そうして、自分もいつか、髪が白みしわがよつて、ついには腰のまがるような、老いの身になってしまった。都も昔の都でなければ、自分も昔の自分でない。

その上、貌かたちも変われば、心も変わった。始めて娘と今の夫との関係を知った時、自分は泣いて騒いだ覚えがある。が、こうなって見れば、それも、当たりまえの事としか思われない。盗みをする事も、人を殺す事も、慣れれば、家業と同じである。言わば京の大路小おおじこ路に、雑草がはえたように、自分の心も、もうさんだ事を、苦にしないほど、すさんでしまった。が、一方から見ればまた、すべてが変わったようで、変わっていない。娘の今している事と、自分の昔した事とは、存外似よったところがある。あの太郎と次郎にし

ても、やはり今の夫の若かつたところと、やる事にたいした変わりはない。こうして人間は、いつまでも同じ事を繰り返してゆくのであらう。そう思えば、都も昔の都なら、自分も昔の自分である。……

猪熊いのくまのばばの心の中には、こういう考えが、漠然ぼくぜんとながら、浮かんで来た。そのさびしい心もちに、つまされたのであらう、丸い目がやさしくなつて、墓ひきのような顔の肉が、いつのまにか、ゆるんで来る。——と、また急に、老婆は、生き生きと、しわだらけの顔をにやつかせて、蛙股かえるまたの杖つえのはこびを、前よりも急がせ始めた。

それも、そのはずである。四五間先に、道とすすき原とを（これも、元はたれかの広庭であつたのかもしれない。）隔てる、くずれかかつた築土つじがあつて、その中に、盛りをすぎた合歡ねむの木が二三本、こけの色の日に焼けた瓦かわらの上に、ほほけた、赤い花をたらしめている。それを空そらに、枯れ竹の柱を四すみへ立てて、古むしろの壁を下げた、怪しげな小屋が一つ、しょんぼりとかけてある。——場所と言ひ、様子と言ひ、中には、こじきでも住んでいるらしい。

別して、老婆の目をひいたのは、その小屋の前に、腕を組んでたたずんだ、十七八の若侍で、これは、朽ち葉色の水干くろぎやに黒鞆たちの太刀を横たえたのが、どういふわけか、しさい

らしく、小屋の中をのぞいている。そのういしい眉まゆのあたりから、まだ子供らしさのぬけない頬ほおのやつれが、一目で老婆に、そのたれという事を知らせてくれた。

「何をしているのだえ。次郎さん。」

猪熊いのくまのぼばは、そのそばへ歩みよると、蛙かえる股またの杖つえを止めて、あごをしゃくりながら、

呼びかけた。

相手は、驚いて、ふり返ったが、つくも髪かみの、蟄ひきの面つらの、厚いくちびるをなめる舌を見ると、白い齒を見せて微笑しながら、黙つて、小屋の中を指さした。

小屋の中には、破れ畳を一枚、じかに地面へ敷いた上に、四十格がっこう好こうの小柄な女が、石を枕まくらにして、横になつてゐる。それも、肌はだをおおうものは、腰のあたりにかけてある、麻あさの汗衫かざみ一つぎりで、ほとんど裸と変わりが無い。見ると、その胸や腹は、指で押しても、血膿ちうみにまじつた、水がどろりと流れそうに、黄いろくなめらかに、むくんでゐる。ことに、むしろの裂け目から、天日てんぴのさしこんだ所で見ると、わきの下や首のつけ根に、ちようど腐あんずつた杏あんずのような、どす黒い斑まだらがあつて、そこからなんとも言いようのない、異様な臭気かが、もれるらしい。

枕もとには、縁の欠けた土器かわらけがたつた一つ（底に飯粒がへばりついてゐるところを見

ると、元は粥かゆでも入れたものであろう。捨かてたように置いてあつて、たれがしたいたずらか、その中に五つ六つ、泥どろだらけの石ころが行儀よく積むんである。しかも、そのまん中に、花も葉もひからびた、合ねむ歡むを一枝立てたのは、おおかた高たか坏つきへ添そえる色紙しきしの、心こころ葉はをまねたものであろう。

それを見ると、気丈いよくまな猪熊いのくまのばばも、さすがに顔をしかめて、あとへさがった。そうして、その刹せつ那なに、突然なさつきの蛇なの死骸しがいを思い浮うかべた。

「なんだえ。これは。疫病えやみにかかつている人じゃないか。」

「そうさ。とてもいけないというので、どこかこの近所うちの家で、捨かてたのだろう。これじゃ、どこでも持てあつかうよ。」

次郎はまた、白い齒を見せて、微笑した。

「それを、お前さんはまた、なんだつて、見てなんぞいるのさ。」

「なに、今ここを通りかかったら、野ら犬が二三匹、いい餌食えじきを見つけた気で、食いそうにしていたから、石をぶつけて、追ひ払はらつてやったところさ。わたしが来なかつたら、今ごろはもう、腕の一つも食かわれてしまったかもしれない。」

老婆は、蛙かえる股またの杖つえにあごをのせて、もう一度しみじみ、女のからだを見た。さつき、

犬が食いかかったというのは、これであろう。――破れ畳の上から、往來の砂の中へ、斜めにのぼした二の腕には、水氣すいきを持った、土け色の皮膚に、鋭い齒の跡が三つ四つみよ、紫がかつて残っている。が、女は、じつと目をつぶつたなり、息さえ通かよっているかどうかかわらない。老婆は、再び、はげしい嫌惡けんおの感に、面おもてを打たれるような心もちがした。

「いつたい、生きているのかえ。それとも、死んでいるのかえ。」

「どうだかね。」

「氣らくだよ、この人は。死んだものなら、犬が食つたつて、いいじゃないか。」

老婆は、こう言ふと、蛙かえる股またの杖つえをのべて、遠くから、ぐいと女の頭を突いてみた。

頭はまぐらの石をはずれて、砂に髪をひきながら、たわいなく畳の上へぐたりとなる。が、病人は、依然として、目をつぶつたまま、顔の筋肉一つ動かさない。

「そんな事をしたつて、だめだよ。さっきなんぞは、犬に食いつかれてさえ、やつぱりじつとしていたんだから。」

「それじゃ、死んでいるのさ。」

次郎は、三たび白い齒を見せて、笑つた。

「死んでいたつて、犬に食わせるのは、ひどいやね。」

「何がひどいものかね。死んでしまえば、犬に食われたって、痛くはなしき。」

老婆は、杖つえの上でのび上がりながら、ぎよろり目を大きくして、あざわらうように、こう言つた。

「死ななくつたって、ひくひくしているよりは、いつそ一思いに、のど笛でも犬に食いつかれたほうが、ましかもしれないわね。どうせこれじゃ、生きていたって、長い事はありませんさ。」

「だって、人間が犬に食われるのを、黙って見てもいられないじゃないか。」

すると、猪熊いのくまのぼばは、上くちびるをべろりとやって、ふてぶてしく空うそぶいた。

「そのくせ、人間が人間を殺すのは、お互いに平気で、見ているじゃないか。」

「そう言えば、そうさ。」

次郎は、ちよいと鬢びんをかいて、四たび白い歯を見せながら、微笑した。そうして、やさしく老婆の顔をながめながら、

「どこへ行くのだい、おぼばは。」と問いかけた。

「真木島まきのしまの十郎と、高市たけちの多襄丸たじょうまると、——ああ、そうだ。関山せきやまの平六へいろくへは、お前さんに、言づけを頼もうかね。」

こう言ううちに、猪熊いのくまのばばは、杖つえにすがって、もう二足三足歩いている。

「ああ、行つてもいい。」

次郎もようやく、病人の小屋をあとにして、老婆と肩を並べながら、ぶらぶら炎天の往來を歩きだした。

「あんなものを見たんで、すっかり気色きしよくがわるくなつてしまったよ。」

老婆は、大仰おおぎように顔をしかめながら、

「——ええと、平六の家は、お前さんうちも知つているだろう。これをまつすぐに行つて、立り本寺ゆうほんじの門を左へ切れると、藤判官とうぼうがんの屋敷がある。あの一町ばかり先き。ついだから、屋敷のまわりでもまわつて、今夜の下見をしておおきよ。」

「なにわたしも、始めからそのつもりで、こつちへ出て来たのさ。」

「そうかえ、それはお前さんにしては、気がきいたね。お前さんのにいきんの御面相じや、一つ間違うと、向こうにけどられそうで、下見に行つても、もらえないが、お前さんなら、大丈夫だよ。」

「かわいそうに、兄きもおばばの口にかかつちや、かなわないね。」

「なに、わたしなんぞはいちばん、あの人の事をよく言つてゐるほうさ。おじいさんなん



ぞと来たら、お前さんにも話せないような事を、言っているわね。」

「それは、あの事があるからさ。」

「あつたつて、お前さんの悪口は、言わないじゃないか。」

「じゃおかた、わたしは子供扱いにされているんだろう。」

二人は、こんな閑談をかわしながら、狭い往来をぶらぶら歩いて行つた。歩くごとに、京の町の荒廃は、いよいよ、まのあたりに開けて来る。家と家との間に、草いきれを立てている蓬よもぎ原、そのところどころに続いている古築土ふるつゐじ、それから、昔のまま、わずかに残っている松や柳——どれを見ても、かすかに漂う死人しびとのにおいと共に、滅びてゆくこの大きな町を、思わせないものはない。途中では、ただ一人、手に足駄あしだをはいている、いざりのこじきゆに行きちがつた。――

「だが、次郎さん、お氣をつけよ。」

猪熊いのくまのばばは、ふと太郎の顔を思い浮かべたので、ひとり苦笑を浮かべながら、こう言つた。

「娘の事じゃ、ずいぶんにいさんも、夢中になりかねないからね。」

が、これは、次郎の心に、思つたよりも大きな影響を与えたい。彼は、ひいでた眉まゆ

の間を、にわかに曇らせながら、不快らしく目を伏せた。

「そりやわたしも、氣をつけている。」

「氣をつけていてもさ。」

老婆は、いささか、相手の感情の、この急激な変化に驚きながら、例のごとくくちびるをなめなめ、つぶやいた。

「氣をつけていてもだわね。」

「しかし、兄きの思わくは兄きの思わくで、わたしには、どうにもできないじゃないか。」

「そう言えば、み実もふたもなくなるがさ。実わたしは、きのう娘に会ったのだよ。すると、きよう末ひつじの下刻げくに、お前さんと寺の門の前で、会う事になっていると言うじゃないか。それで、お前さんのにいさんには半月近くも、顔は合わせないようになっているとね、太郎さんがこんな事を知ってごらん。また、お前さん、ひともんちやく一悶着もんちやくだろう。」

次郎は、老婆のびび々として説くことばをさえぎるように、黙って、いらだたく度度もうなずいた。が、いのくま猪熊いのくまのぼばは、容易に口を閉ざしそうなけしきもない。

「さつき、向こうの辻つじで、太郎さんに会った時にも、わたしはよくそう言って来たけれどね、そうなりや、わたしたちの仲間だもの、すぐに刃物はもの三昧ざんまいだろうじゃないか。万一、

その時のはずみで、娘にけがでもあつたら、とわたしは、ただ、それが心配なのさ。娘は、なにしろあのおりの気質だし、太郎さんにしても、一徹人いつてつじんだから、わたしは、お前さんによく頼んでおこうと思つてね。お前さんは、死人しびとが犬に食われるのさえ、見ていられないほど、やさしいんだから。」

こう言つて、老婆は、いつか自分にも起こつて来た不安を、しいて消そうとするように、わざとしわがれた声で、笑つて見せた。が、次郎は依然として、顔を暗くしながら、何か物思いにふけるように、目を伏せて歩いている。……

「大事おおごとにならなければいいが。」

猪熊いのくまのばばは、蛙かえるまた股つえの杖を早めながら、この時始めて心の底で、しみじみこう、祈つたのである。

かれこれその時分の事である。楚すわえの先なに蛇ながむしの死骸しがいをひっつけた、町の子供が三四人、病人の小屋の外を通りかかると、中でもいたずらな一人が、遠くから及び腰になつて、その蛇ながむしを女の顔の上へほうり上げた。青く脂あぶらの浮いた腹がぺたり、女の頬ほおに落ちて、それから腐れ水にぬれた尾が、ずるずるあごの下へたれる——と思うと、子供たちは、一度にわっ

とわめきながら、おびえたように、四方へ散った。

今まで死んだようになっていた女が、その時急に、黄いろくたるんだまぶたをあけて、腐った卵の白味のような目を、どんより空に据えながら、砂まぶれの指を一つびくりとやると、声とも息ともわからないものが、干割れたくちびるの奥のほうから、かすかにもれて来たからである。

三

猪熊いのくまのばばに別れた太郎は、時々扇で風を入れながら、日陰も選ばず、朱雀すざくの大路おおじを北へ、進まない歩みをはこんだ。――

日中の往来は、人通りもきわめて少ない。栗毛くりげの馬に平文ひらもんの鞍くらを置いてまたがった武士が一人、鎧櫃よろいびつを荷ちようどなつた調度掛ていどがけを従えながら、綾蘭笠あやいがさに日あやをよけて、悠々ゆうゆうと通ったあとには、ただ、せわしない燕つばくらが、白い腹をひらめかせて、時々、往来の砂くもをかすめるばかり、板葺いたぶき、檜皮葺ひわだぶきの屋根の向こうに、むらがっているひでり雲も、さつきから、凝然と、金銀銅鉄とを熔とかしたまま、小ゆるぎをするけしきはない。まして、両側に

建て続いた家々は、いずれもしんと静まり返って、その板いた・蔀じとみや蒲かます・簾すだれの後ろでは、町じゅうの人がことごとく、死に絶えてしまったかとさえ疑われる。――

猪熊いのくまのばばの言つたように、沙金しゃきんを次郎に奪われるという恐れは、ようやく目の前に迫つて来た。あの女が、――現在養父にさえ、身を任せたあの女が、あばたのある、片目の、醜いおれを、日にこそ焼けているが目鼻立ちの整つた、若い弟に見かえるのは、もとよりなんの不思議もない。おれは、ただ、次郎が、――子供の時から、おれを慕つてくれたあの次郎が、おれの心もちを察してくれて、よしや沙金のほうから手を出してもその誘惑に乘らないだけの、慎みを持つてくれる事と、いちずに信じ切つていた。が、今になつて考えれば、それは、弟を買いかぶつた、虫のいい量りようけんに見に過ぎなかつた。いや、弟を見上げすぎたというよりも、沙金のみだらな媚こびのたくみを、見下げすぎた誤りだった。ひとり次郎ばかりではない。あの女のまなざし一つで、身を滅ぼした男の数は、この炎天にひるがえる燕つばくちかすの数よりも、たくさんある。現にこう言うおれでさえ、ただ一度、あの女を見たばかりで、とうとう今ののように、身をおとした。……

すると四条坊門しじょうぼうもんの辻つじを、南へやる赤糸毛あかいとげの女車おんなぐるまが、静かに太郎の行く手を通りすぎる。車の中の人は見えないが、紅べにの裾濃すそごに染めた、すずしの下簾したすだれが、町すじの荒涼わらわとしてゐるだけに、ひときわ目に立つてなまめかしい。それにつき添った牛飼いの童わらわと雑色ぞうしきとは、うさんらしく太郎のほうへ目をやったが、牛だけは、角つのをたれて、漆のようろうように黒い背を鷹揚おうようにうねらしながら、わき見もせず、のっそりと歩いてゆく。しかしとりとめのない考えに沈んでゐる太郎には、車の金具の、まばゆく日に光ったのが、わずかに目にはいっただけである。

彼は、しばらく足をとめて、車を通りこさせてから、また片目を地に伏せて、黙々と歩きはじめた。――

(おれが右の獄ひとやの放免ほうめんをしていた時の事を思えば、今では、遠い昔のような、心もちがする。あの時のおれと今のおれとを比べれば、おれ自身にさえ、同じ人間のような気はしない。あのころのおれは、三宝を敬う事も忘れなければ、王法にしたがう事も怠らなかつた。それが、今では、盗みもする。時によつては、火つけもする。人を殺した事も、二度や三度ではない。ああ、昔のおれは――仲間の放免といつしよになって、いつもの七半しちはん

を打ちながら、笑い興じていた、あの昔のおれは、今のおれの目から見ると、どのくらいしあわせだったかわからない。

考えれば、まだきのうのように思われるが、実はもう一年前まえになった。——あの女が、盗みとがの咎で、検非違使けびいしの手から、右の獄ひとやへ送られる。おれがそれと、ふとした事から、牢ろう格子うこうしを隔てて、話し合うような仲になる。それから、その話が、だんだんたび重なつて、いつか互いに身の上の事まで、打ち明け始める。とうとう、しまいには、猪熊いのくまのばばや同類の盗人が、牢ろうを破つてあの女を救い出すのを、見ないふりをして、通してやった。

その晩から、おれは何度となく、猪熊のばばの家へ出はいりをした。沙金しゃきんは、おれが行く時刻を見はからつて、あの半はじとみ蔀すずめいろときの間から、雀色すずめいろとき時の往来をのぞいている。そうしておれの姿が見えると、鼠鳴ねずみなきをして、はいれと言う。家の中には、下衆女げすおんなの阿濃あこぎのほかにも、たれもない。やがて、蔀しとみをおろす。結び燈台へ火をつける。そうして、あの何畳かの畳の上に、折敷おしきや高坏たかつきを、所狭く置きならべて、二人ぎりの小酒盛こさかもりをする。そのあげくが、笑つたり、泣いたり、けんかをしたり、仲直りをしたり——言わば、世間並みの恋人どうしが、するような事をして、いつでも夜を明かした。

日の暮れに来て、夜よのひき明け方に帰る。——あれが、それでも一月ひとつきは続いたろう。

そのうちに、おれには沙金が猪熊のばばのつれ子である事、今では二十何人かの盗人の頭かしらになつて、時々洛中らくちゅうをさわがせている事、そうしてまた、日ごろは容色を売つて、傀儡くわい同様な暮らしをしている事——そういう事が、だんだんわかつて来た。が、それは、かえつてあの女に、双紙の中の人間めいた、不思議な円光をかけるばかりで、少しも卑しいなどという気は起こさせない。無論、あの女は、時々おれに、いつそ仲間へはいれと言うが、おれはいつも、承知しない。すると、あの女は、おれの事を臆病おくびょうだと言つて、ばかにする。おれはよくそれで、腹を立てた。……）

「はい、はい」と馬をしかる声がする。太郎は、あわてて、道をよけた。

米俵を二俵ずつ、左右へ積んだ馬をひいて、汗衫かぎみ一つの下衆げすが、三条坊門の辻つじを曲がりながら、汗もふかずに、炎天の大路おおじを南へ下つて来る。その馬の影が、黒く地面に焼きついた上を、燕つばくらが一羽、ひらり羽根を光らせて、すじかいに、空そらへ舞い上がった。と思うと、それがまた礫つぶてを投げるように、落として来て、太郎の鼻の先を一文字に、向こうの板いたびさ底しの下へはいる。

太郎は、歩きながら、思い出したように、はたはたと、黄紙きがみの扇を使った。——



(そういう月日が、続くともなく続くうちに、おれは、偶然あの女と養父との関係に、気がついた。もつともおれ一人が、沙金しゃきんを自由にする男でないという事も、知っていないかつたわけではない。沙金自身さえ、関係した公卿くけの名や法師の名を、何度も自慢らしくおれに話した事がある。が、おれはこう思った。あの女の肌はだは、おおぜいの男を知っているかもしれない。けれども、あの女の心は、おれだけが占有している。そうだ、女の操みさおは、からだにはない。——おれは、こう信じて、おれの嫉妬しっとをおさえていた。もちろんこれも、あの女から、知らず知らずおれが教わった、考え方にすぎないかもしれない。が、ともかくもそう思うと、おれの苦しい心はいくぶんか楽らくになった。しかし、あの女と養父との関係は、それとちがう。

おれは、それを感じいた時に、なんとも言えず、不快だった。そういう事をする親子なら、殺して飽きたらない。それを黙って見る実の母の、猪熊いのくまのばばもまた、畜生より、無残なやつだ。こう思ったおれは、あの酔いどれのおやじの顔を見るたびに、何度太刀たちへ手をかけたか、わからない。が、沙金はそのたびに、おれの前で、ことさら、手ひどく養父をばかにした。そうしてその見え透いた手くだがまた、不思議におれの心を鈍らせた。

「わたしはおとうさんがいやでいやでしかたがないんです」と言われれば、養父をにくむ気にはなつても、沙金をにくむ気には、どうしてもなれない。そこで、おれと養父とは、きょうがきょうまで、互いににらみ合いながら、何事もなくすぎて来た。もしあのおじにもう少し、勇気があつたなら、——いや、おれにもう少し、勇気があつたなら、おれたちはとうの昔、どちらか死んでいた事であろう。……）

頭を上げると、太郎はいつか二条を折れて、みもとがわ耳敏川にまたがっている、小さい橋にかかつていた。水のかれた川は、細いながらも、や焼き太刀だちのように、日を反射して、絶えてはつづくはやなぎ葉柳と家々との間に、かすかなせせらぎの音を立てている。その川のはるか下に、黒いものが二つ三つ、鵜うの鳥かと思うように、流れの光を乱しているのは、おおかた町の子供たちが、水でも浴びているのであろう。

太郎の心には、一瞬の間、幼かった昔の記憶が、——弟といっしょに、五条の橋の下で、はえ鰻を釣った昔の記憶が、この炎天に通う微風のように、かなしく、なつかしく、返つて来た。が、彼も弟も、今は昔の彼らではない。

太郎は、橋を渡りながら、うすいあばたのある顔に、また険しい色をひらめかせた。――

（すると、突然ある日、そのころ筑後の前司ちゅうご ぜんじの小舎人ことねりになっていた弟が、盗人の疑いかけられて、左の獄ひとやへ入れられたという知らせが来た。放免ほうめんをしているおれには、獄中の苦しさ、たれよりもよく、わかつている。おれは、まだ筋骨のかたまらない弟の身の上を、自分の事のように、心配した。そこで、沙金しゃきんに相談すると、あの女はさもわけがなさそうに、「牢ろうを破ればいいじゃないの」と言う。かたわらにいた猪熊いのくまのばばも、しきりにそれをすすめてくれる。おれは、とうとう覚悟をきめて、沙金といっしよに、五六人の盗人を語り集めた。そうして、その夜のうちに、獄ひとやをさわがして、難なく弟を救い出した。その時、受けた傷の跡は、今でもおれの胸に残っている。が、それよりも忘れられないのは、おれがその時始めて、放免ほうめんの一人を切り殺した事であった。あの男の鋭い叫び声と、それから、あの血のにおいとは、いまだにおれの記憶を離れない。こう言う今でも、おれはそれを、この蒸し暑い空気の中に、感じるような心もちがする。

その翌日から、おれと弟とは、猪熊の沙金の家で、人目を忍ぶ身になった。一度罪を犯したからは、正直に暮らすのも、あぶない世渡りをしてゆくのも、検非違使けびいしの目には、変

わりがない。どうせ死ぬくらいなら、一日も長く生きていよう。そう思ったおれは、とうとう沙金の言うなりになって、弟といっしょに盗人の仲間入りをした。それからのおれは、火もつける。人も殺す。悪事という悪事で、なに一つしなかったものはない。もちろん、それも始めは、いやいやした。が、してみると、意外に造作ぞうさがない。おれはいつのまにか、悪事を働くのが、人間の自然かもしれないと思いだした。……)

太郎は、半ば無意識に辻つじをまがった。辻には、石でまわりを積んだ一囲いの土饅頭どまんじゅうがあつて、その上に石塔婆せきとうばが二本、並んで、午後の日にかつと、照りつけられている。その根元にはまた、何匹かのとかげが、煤すすのように黒いからだを、気味悪くへばりつかせていたが、太郎の足音に驚いたのであろう、彼の影の落ちるよりも早く、一度にざわめきながら、四方へ散った。が、太郎は、それに目をやるけしきもない。――

「おれは、悪事をつむに従つて、ますます沙金しゃきんに愛あい着じゃくを感じて来た。人を殺すのも、盗みをするのも、みんなあの女ゆえである。――現に牢ろうを破つたのさえ、次郎を助けようと思うほかに、一人の弟を見殺しにすると、沙金にわらわれるのを、おそれたからであつた。――そう思うと、なおさらおれは、何に換えても、あの女を失いたくない。

その沙金を、おれは今、肉身の弟に奪われようとしている。おれが命を賭けて助けてやった、あの次郎に奪われようとしている。奪われようとしているのか、あるいは、もう奪われているのか、それさえも、はっきりはわからない。沙金しやきんの心を疑わなかったおれは、あの女がほかの男をひっぱりこむのも、よくない仕事の方便として、許していた。それから、養父との関係も、あのおじじが親の威光で、何も知らないうちに、誘惑したと思えば、目をつぶって、すごせない事はない。が、次郎との仲は、別である。

おれと弟とは、氣だてが変わっているようで、実は見かけほど、変わっていない。もつとも顔かたちは、七八年前の痘瘡まえもがさが、おれには重く、弟には軽かったので、次郎は、生まれついた眉目みめをそのままに、うつくしい男になったが、おれはそのため片目つぶれた、生まれもつかない不具になった。その醜い、片目のおれが、今まで沙金の心を捕えていたとすれば、（これも、おれのうぬぼれだろうか。）それはおれの魂の力に相違ない。そうして、その魂は、同じ親から生まれた弟も、おれに変わりなく持っている。しかも、弟は、たれの目にもおれよりはうつくしい。そういう次郎に、沙金が心をひかれるのは、もとより理の当然である。その上また、次郎のほうでも、おれにひきくらべて考えれば、到底あの女の誘惑に、勝てようとは思われない。いや、おれは、始終おれの醜い顔を恥じている。

そうして、たいていの情事には、おのずからひかえ目になっている。それでさえ、沙金には、氣違ひのように、恋をした。まして、自分の美しさを知っている次郎が、どうして、あの女の見せる媚<sup>こ</sup>びを、返さずにいられよう。――

こう思えば、次郎と沙<sup>しや</sup>金<sup>きん</sup>とが、近づくようになるのは、無理もない。が、無理がないだけ、それだけ、おれには苦痛である。弟は、沙金をおれから奪おうとする。――それも、沙金の全部を、おれから奪おうとする。いつかは、そうして必ず。ああ、おれの失うのは、ひとり沙金ばかりではない。弟もいつしよに失うのだ。そうして、そのかわりに、次郎と言う名の敵<sup>かたき</sup>ができる。――おれは、敵<sup>かたき</sup>には用捨しない。敵<sup>かたき</sup>も、おれに用捨はしないだろう。そうなれば、落ち着くところは、今からあらかじめわかつている。弟を殺すか、おれが殺されるか。……)

太郎は、死人<sup>しびと</sup>のにおいが、鋭く鼻を打つたのに、驚いた。が、彼の心の中の死が、におったというわけではない。見ると、猪熊<sup>いのくま</sup>の小路のあたり、とある網代<sup>あじろ</sup>の堀<sup>へい</sup>の下に腐爛<sup>ふらん</sup>した子供の死骸<sup>しがい</sup>が二つ、裸のまま、積み重ねて捨ててある。はげしい天日<sup>てんび</sup>に、照りつけられたせいか、変色した皮膚のところどころが、べつとりと紫がかった肉を出して、その上に

はまた青蠅あおばえが、何匹となく止まっている。そればかりではない。一人の子供のうつむけた顔の下には、もう足の早い蟻ありがついた。――

太郎は、まのあたりに、自分の行く末を見せつけられたような心もちがした。そうして、思わず下くちびるを堅くかんだ。――

「ことに、このごろは、沙金しゃきんもおれを避けている。たまに会っても、いい顔をした事は、一度もない。時々はおれに面めんと向かつて、悪口あくこうさえきく事がある。おれはそのたびに腹を立てた。打った事もある。蹴けった事もある。が、打っているうちに、蹴けっているうちに、おれはいつでも、おれ自身を折檻せつかんしているような心もちがした。それも無理はない。おれの二十年の生涯しょうがいは、沙金のあの目の中に宿っている。だから沙金を失うのは、今までのおれを失うのと、変わりはない。

沙金を失い、弟を失い、そうしてそれとともにおれ自身を失ってしまう。おれはすべてを失う時が来たのかもしれない。……)

そう思ううちに、彼は、もう猪熊いのくまのばばの家の、白い布をぶら下げた戸口へ来た。まだここまでも、死人しびとのにおいは、伝わって来るが、戸口のかたわらに、暗い緑の葉をたれ

た枇杷びわがあつて、その影がわずかながら、涼しく窓に落ちてゐる。この木の下を、この戸口へはいった事は、何度あるかわからない。が、これから？

太郎は、急にある氣づかれを感じて、一味の感傷にひとりながら、その目に涙をうかべて、そつと戸口へ立ちよつた。すると、その時である。家の中から、たちまちたたましい女の聲が、猪熊いのくまの爺おじの聲に交じつて、彼の耳を貫ぬいた。沙金しゃきんなら、捨ててはおけない。

彼は、入り口の布をあけて、うすぐらい家の中へ、せわしく一足ふみ入れた。

#### 四

猪熊のばばに別れると、次郎は、重い心をいだきながら、立本寺りゅうほんじの門の石段を、一つずつ数えるように上がつて、そのところどころ剥落はくらくした朱塗りの丸柱の下へ来て、疲れたように腰をおろした。さすがの夏の日も、斜めにつき出した、高い瓦かわらにさえぎられて、ここまではさして来ない。後ろを見ると、うす暗い中に、一体の金剛力士が青蓮花あおれんげを踏みながら、左手の杵きねを高くあげて、胸のあたりに燕つばくらの糞をつけたまま、寂然せきぜんと境内けいだいの



昼を守っている。——次郎は、ここへ来て、始めて落ち着いて、自分の心もちが考えられるような氣になった。

日の光は、相変わらず目の前の往来を、照り白<sup>しら</sup>ませて、その中にとびかう燕<sup>つばくら</sup>の羽を、さながら黒<sup>くろ</sup>縷<sup>じゆす</sup>子か何かのように、光らせている。大きな日傘<sup>ひがき</sup>をさして、白い水干<sup>すいかん</sup>を着た男が一人、青竹<sup>ふばさみ</sup>の文挾<sup>ふみ</sup>にはさんだ文<sup>ふみ</sup>を持って、暑そうにゆっくり通ったあとは、向こうに続いた築土<sup>つじ</sup>の上へ、影を落とす犬もない。

次郎は、腰にさした扇をぬいて、その黒<sup>くろ</sup>柿<sup>がき</sup>の骨を、一つずつ指で送ったり、もどしたりしながら、兄と自分との關係を、それからそれへ、思い出した。——

なんで自分は、こう苦しまなければ、ならないのであろう。たった一人の兄は、自分を敵<sup>かたき</sup>のように思っている。顔を合わせるごとに、こちらから口をきいても、浮かない返事をして、話の腰を折ってしまう。それも、自分と沙<sup>しや</sup>金<sup>きん</sup>とが、今のようになつてみれば、無理のない事に相違ない。が、自分は、あの女に会うたびに、始終兄にすまないと思つている。別して、会つたのちのさびしい心もちでは、よく兄がいとしくなつて、人知れない涙もこぼしこぼした。現に、一度なぞは、このまま、兄にも沙金にも別れて、東国へでも下ろうとさえ、思つた事がある。そうしたら、兄も自分を憎まなくなるだろうし、自分

も沙金を忘れられるだろう。そう思つて、よそながら暇いとまごいをするつもりで、兄の所へ会いにゆくと、兄はいつも、そつけなく、自分をあしらつた。そうして、沙金に会うと、――今度は自分が、せつかくの決心を忘れてしまう。が、そのたびに、自分はどのくらい、自分自身を責めた事であろう。

しかし、兄には、自分のこの苦しみがわからない。ただいちずに、自分を、恋の敵かたきだと思つてゐる。自分は、兄にののしられてもいい。顔につばきされてもいい。あるいは場合によつては、殺されてもいい。が、自分が、どのくらい自分の不義を憎んでいるか、どのくらい兄に同情しているか、それだけは、察していてもraitたい。その上でならば、どんな死にざまをするにしても、兄の手にかかれれば、本望だ。いや、むしろ、このごろの苦しみよりは、一思いに死んだほうが、どのくらいしあわせだかわからない。

自分は、沙金しゃきんに恋をしている。が、同時に憎んでもいる。あの女の多情な性質は、考へただけでも、腹立たしい。その上に、絶えずうそをつく。それから、兄や自分でさえためらうような、ひどい人殺しも、平気でする。時々、自分は、あの女のみだらな寝姿をながめながら、どうして、自分がこんな女に、ひかされるのだろうと思つたりした。ことに、見ず知らずの男にも、なれなれしく肌はだを任せるのを見た時には、いつそ自分の手で、殺し

てやろうかという気にさえた。それほど、自分は、沙金を憎んでいる。が、あの女の目を見ると、自分はやつぱり、誘惑に陥つてしまう。あの女のように、醜い魂と、美しい肉身とを持った人間は、ほかにいない。

この自分の憎しみも、兄にはわかっていないようだ。いや、元来兄は、自分のように、あの女の獣のような心を、憎んではいけないらしい。たとえば、沙金しゃきんとほかの男との関係を見るにしても、兄と自分とは全く目がちがう。兄は、あの女がたれといっしょにいるのを見ても、黙っている。あの女の一時の気まぐれは、気まぐれとして、許しているらしい。が、自分は、そういかない。自分にとっては、沙金はだみが肌身を汚すけが事は、同時に沙金はだみが心を汚す事だ。あるいは心を汚すより、以上の事のように思われる。もちろん自分には、あの女の心が、ほかの男に移るのも許されない。が、肌身をほかの男に任せるのは、それよりもなお、苦痛である。それだからこそ、自分は兄に対しても、嫉妬しつとをする。すまないとは思いつつ、嫉妬をする。してみると、兄と自分との恋は、まるでちがう考えが、元になつていのであるまいか。そうしてそのちがいが、よけい二人の仲を、悪くするのではあるまいか。…………

次郎は、ぼんやり往来をながめながら、こんな事をしみじみと考えた。すると、ちよう

どその時である。突然、けたたましい笑い声が、まばゆい日の光を動かして、往来のどちらから聞こえて来た。と思うと、かん高い女だかの声が、舌のまわらない男の声といっしょになって、人もなげに、みだらな冗談を言いかわして来る。次郎は、思わず扇を腰にさして、立ち上がった。

が、柱の下をはなれて、まだ石段へ足をおろすかおろさないうちに、小路こうじを南へ歩いて来た二人の男女なんによが、彼の前を通りかかった。

男は、樺かばさくら桜の直垂ひたたれに梨打なしうちの烏帽子えぼしをかけて、打ち出しの太刀たちを濶達かつたつに佩いた、三十ばかりの年配で、どうやら酒に酔っているらしい。女は、白地にうす紫の模様のある衣きぬを着て、市女笠いちめがさに被衣かすきをかけているが、声と言ひ、物ごしと言ひ、紛れもない沙金しゃきんである。——次郎は、石段をおりながら、じつとくちびるをかんで、目をそらせた。が、二人とも、次郎には、目をかける様子がない。

「じゃよくつて。きつと忘れちやいやよ。」

「大丈夫だよ。おれがひきうけたからは、大船おおぶねに乗った気でいるがいい」

「だって、わたしのほうじゃ命がけなんですもの。このくらい、念を押さなくちやしようがないわ。」

男は赤ひげの少しある口を、咽<sup>のど</sup>まで見えるほど、あけて笑いながら、指で、ちよいと沙金の頬<sup>ほお</sup>を突つついた。

「おれのほうも、これで命がけさ。」

「うまく言っているわ。」

二人は、寺の門の前を通りすぎて、さつき次郎が猪熊<sup>いのくま</sup>のばぼと別れた辻<sup>つじ</sup>まで行くと、そこに足をとめたまましばらくは、人目も恥じず、ふざけ合っていたが、やがて、男は、振りかえり振りかえり、何かしきりにからかいながら、辻を東へ折れてしまう。女は、くびすをめぐらして、まだくすくす笑いながら、またこっちへ帰って来る。——次郎は、石段の下にたたずんで、うれしいのか情けないのか、わからないような感情に動かされながら、子供らしく顔を赤らめて、被衣<sup>かぎぎ</sup>の中からのぞいている、沙金<sup>しゃきん</sup>の大きな黒い目を迎えた。

「今のやつを見た？」

沙金は、被衣<sup>かぎぎ</sup>を開いて、汗ばんだ顔を見せながら、笑い笑い、問いかけた。

「見なくつてさ。」

「あれはね。——まあここへかけましょう。」

二人は、石段の下の段に、肩をならべて、腰をおろした。幸い、ここには門の外に、ただ一本、細い幹をくねらした、赤松の影が落ちてゐる。

「あれは、とうほうがん藤判官の所の侍なの。」

沙金は、石段の上に腰をおろすかおろさないのに、いちめがさ市女笠をぬいで、こう言つた。小柄な、手足の動かし方に猫のねこような敏捷びんしょうさがある、ちゅうにく中肉の、二十五六の女である。顔は、恐ろしい野性と異常な美しさとが、一つになったとでもいうのであろう。狭い額とゆたかなほお頬と、あざやかな齒とみだらなくちびると、鋭い目と鷹揚おうような眉と、――すべて一つになり得そうもないものが、不思議にも一つになって、しかもそこに、爪つめばかりの無理もない。が、中でもみごとなのは、肩にかけた髪で、これは、日の光のかげんによると、黒い上につややかな青みが浮く。さながら、鳥からすの羽根と違いがない。次郎は、いつ見ても変わらない女のなまめかしさを、むしろ憎いように感じたのである。

「そうして、お前さんのおとこ情人なんだろう。」

沙金は、目を細くして笑いながら、無邪気らしく、首をふつた。

「あいつのばかと言つたら、ないのよ。わたしの言う事なら、なんでも、犬のようにきくじやないの。おかげで、何もかも、すっかりわかつてしまった。」

「何がさ。」

「何がって、とうほうがん藤判官の屋敷の様子がよ。そりやひとかたならないおしやべりなんですよ。さつきなんぞは、このごろ、あすこで買った馬の話まで、話して聞かしたわ。——そうそう、あの馬は太郎さんに頼んで盗ませようかしら。みちのくで陸奥出の三才駒さんさいごまだつていうから、まんざらでもないわね。」

「そうだ。兄きなら、なんでもお前のぎよ御意次第だから。」

「いやだわ。やきもちをやかれるのは、わたし大きらい。それも、太郎さんなんぞ、——そりやはじめは、わたしのほうでも、少しはどうとか思ってたけれど、今じゃもうなんでもないわ。」

「そのうちに、わたしの事もそう言う時が来やしないか。」

「それは、どうだかわかりやしない。」

しやきん沙金は、またかん高いだか声で、笑った。

「おこつたの？　じゃ、来ないって言いましょうか。」

ないしんにややしや「内心女夜叉さね。お前は。」

次郎は、顔をしかめながら、足もとの石を拾って、向こうへ投げた。

「そりや、女夜叉によやしやかもしれないわ。ただ、こんな女夜叉によやしやにほれられたのが、あなたの因果だわね。——まだうたぐっているの。じゃわたし、もう知らないからいい。」

沙金は、こう言つて、しばらくじつと、往來を見つめていたが、急に鋭い目を、次郎の上に転じると、たちまち冷ややかな微笑が、くちびるをかすめて、一過した。

「そんなに疑うのなら、いい事を教えてあげましょうか。」

「いい事？」

「ええ」

女は、顔を次郎のそばへ持つて來た。うす化粧のにおいが、汗にまじつて、むんと鼻をつく。——次郎は、身のうちがむずがゆいほど、はげしい衝動を感じて、思わず顔をわきへむけた。

「わたしね、あいつにすっかり、話してしまったの。」

「何を？」

「今夜、みんなで藤判官とうぼうがんの屋敷へ、行くという事を。」

次郎は、耳を信じなかった。息苦しい官能の刺激も、一瞬の間に消あいだえてしまう。——彼はただ、疑わしげに、むなしく女の顔を見返した。



「そんなに驚かなくなつていいわ。なんでもない事なのよ。」

沙金<sup>しゃきん</sup>は、やや声を低めて、あざわらうような調子を出した。

「わたしこう言つたの。わたしの寝る部屋<sup>へや</sup>は、あの大路面<sup>おおじめん</sup>の檜垣<sup>ひがき</sup>のすぐそばなんです、  
ゆうべその檜垣<sup>ひがき</sup>の外で、きつと盗人でしょう、五六人の男が、あなたの所へはいる相談を  
しているのが聞こえました。それがしかも、今夜なんです。おなじみがいに、教えてあげ  
ましたから、それ相当の用心をしないと、あぶのうござんすよつて。だから、今夜は、き  
つと向こうにも、手くばりがあるわ。あいつも、今人を集めに行つたところなの。二十人  
や三十人の侍は、くるにちがいなくつてよ。」

「どうしてまた、そんなよけいな事をしたのさ。」

次郎は、まだ落ち着かない様子で、当惑したらしく、沙金<sup>しゃきん</sup>の目をうかがつた。

「よけいじゃないわ。」

沙金は、気味悪く、微笑した。そうして、左の手で、そつと次郎の右の手に、さわりな  
がら、

「あなたのためにしたの。」

「どうして?」

こう言いながら、次郎の心には、恐ろしいあるものが感じられた。まさか――

「まだわからない？　そう言っておいて、太郎さんに、馬を盗む事を頼めば――ね。いくらなんだって、一人じやかなわないでしょう。いえさ、ほかのものが加勢をしたって、知れたものだわ。そうすれば、あなたもわたしも、いいじやないの。」

次郎は、全身に水を浴びせられたような心もちがした。

「兄きを殺す！」

沙金<sup>しゃきん</sup>は、扇をもてあそびながら、素直にうなずいた。

「殺しちや悪い？」

「悪いよりも――兄きを罠<sup>わな</sup>にかけて――」

「じやあなた殺せて？」

次郎は、沙金の目が、野猫<sup>のねこ</sup>のように鋭く、自分を見つめているのを感じた。そうして、その目の中に、恐ろしい力があつて、それが次第に自分の意志を、麻痺<sup>まひ</sup>させようとするのを感じた。

「しかし、それは卑怯<sup>ひきよう</sup>だ。」

「卑怯でも、しかたがなくはない？」

沙金<sup>しゃきん</sup>は、扇をすてて、静かに両手で、次郎の右の手をとらえながら、追窮した。

「それも、兄き一人やるのならいいが、仲間を皆、あぶない目に会わせてまで——」

こう言いながら、次郎は、しまったと思った。狡猾<sup>こうかつ</sup>な女はもちろん、この機会を見のがさない。

「一人やるのならいいの？　なぜ？」

次郎は、女の手をはなして、立ち上がった。そうして、顔の色を変えたまま、黙って、

沙金<sup>しゃきん</sup>の前を、右左に歩き出した。

「太郎さんを殺していいんなら、仲間なんぞ何人殺したって、いいでしょう。」

沙金は、下から次郎の顔を見上げながら、一句を射た。

「おばばはどうする？」

「死んだら、死んだ時の事だわ。」

次郎は、立ち止まって、沙金の顔を見おろした。女の目は、侮蔑<sup>ぶべつ</sup>と愛欲とに燃えて炭火のように熱を持っている。

「あなたのためなら、わたしたれを殺してもいい。」

このことばの中には、蝎<sup>さそり</sup>のように、人を刺すものがある。次郎は、再び一種の戦慄<sup>せんりつ</sup>を

感じた。

「しかし、兄きは——」

「わたしは、親も捨てているのじゃない？」

こう言つて、沙金は、目を落とすと、急に張りつめた顔の表情がゆるんで、焼け砂の上へ、日に光りながらはらはらと涙が落ちた。

「もうあいつに話してしまったのに、——今さら取り返しはつきはしない。——そんな事がわかったら、わたしは——わたしは、仲間に——太郎さんに殺されてしまうじゃないの。」

その切れ切れなことばと共に、次郎の心には、おのずから絶望的な勇氣が、わいてくる。血の色を失つた彼は、黙つて、土にひざをつきながら、冷たい両手に堅く、沙金しゃぎんの手をとらえた。

彼らは二人とも、その握りあう手のうちに、恐ろしい承諾の意を感じたのである。

白い布をかかげて、家の中に一足ふみこんだ太郎は、意外な光景に驚かされた。――  
 見ると、広くもない部屋の中には、廚くりやへ通う遣戸やりどが一枚、斜めに網代屏風あじろびようぶの上へ、倒  
 れかかつて、その拍子にひっくり返ったものであろう、蚊やりをたく土器かわらけが、二つにな  
 ったところがりながら、一面にあたりへ、燃え残った青松葉を、灰といっしよにふりまいて  
 いる。その灰を頭から浴びて、ちぢれ髪ふとの、色の悪い、肥ふとった、十六七の下衆女げすおんなが一人、  
 これも酒肥さかぶとりに肥ふとった、はげ頭の老人に、髪ふとの毛をつかまれながら、怪しげな麻ひとえの単衣  
 の、前もあらわに取り乱したまま、足をばたばた動かして、氣違ふといのように、悲鳴を上げ  
 る――と、老人は、左手に女の髪をつかんで、右手に口の欠けた瓶子へいしを、空ざまにさし上  
 げながら、その中にすすけた液体を、しいて相手の口へつぎこもうとする。が、液体は、  
 いたずらに女の顔を、目と言わず、鼻と言わず、うす黒く横流れするだけで、口へは、ほ  
 とんどはいらないらしい。そこで老人は、いよいよ、氣をいらって無理に女の口を、割ろ  
 うとする。女は、とられた髪も、ぬけるほど強く、頭を振って、一滴もそれを飲むまいと  
 する。手と手と、足と足とが、互いにもつれたり、はなれたりして、明るい所から、急に  
 うす暗い家の中へはいった、太郎の目には、どちらがどちらのからだとも、わからない。  
 が、二人がたれだという事は、もちろん一目見て、それと知れた。――

太郎は、草履ぞうりを脱ぐ間まももどかしそうに、あわただしく部屋へやの中へおどりこむと、とつさに老人の右の手をつかんで、苦もなく瓶子へいしをもぎはなしながら、怒氣を帯びて、一喝いつかつした。

「何をする？」

太郎の鋭いこのことば、たちまちかみつくような、老人のことばで答えられた。

「おぬしこそ、何をする。」

「おれか。おれならこうするわ。」

太郎は、瓶子へいしを投げすてて、さらに相手の左の手を、女の髪からひき離すと、足をあげて老人を、遣戸やりどの上へ蹴倒けたおした。不意の救いに驚いたのであろう、阿濃あごぎはあわてて、二之間けん這いのいたが、老人の後しりえへ倒れたのを見ると、神かみ仏ほとけをおがむように、太郎の前へ手を合あわせて、震えながら頭を下げた。と思うと、乱れた髪もつくろわずに、脱兎だつとのごとく身をかわして、はだしのまま、縁を下へ、白い布をひらりとくぐる。——猛然として、追いますぐとすると猪熊いのくまの爺おじを、太郎が再び一蹴いっしゅうして、灰の中に倒した時には、彼女はすでに息を切らせて、枇杷びわの木の下を北へ、こけつまろびつして、走っていた。……

「助けてくれ。人殺しじや。」

老人は、こうわめきながら、始めの勢いにも似ず、網代屏風あじろびようぶをふみ倒して、廚くりやのほうへ逃げようとする。——太郎は、すばやく猿臂えんぴをのべて、浅黄すいかんの水干の襟上えりがみをつかみながら、相手をそこへ引き倒した。

「人殺し。人殺し。助けてくれ。親殺しじや。」

「ばかな事を。たれがおぬしなぞ殺すものか。」

太郎は、ひざの下に老人を押し伏せたまま、こう高らかに、あざわらった。が、それと同時に、このおやじを殺したいという欲望が、おさえがたいほど強く、起こつて来た。殺すのには、もちろんなんのめんどうもない。ただ、一突き——あの赤く皮のたるんでいる頸うなじを、ただ、一突き突きさえすれば、それでもう万事が終わつてしまう。突き通した太刀たちのきつさきが、晝へはいる手答えと、その太刀の柄つかへ感じて来る、断末魔の身もだえと、そうして、また、その太刀を押しもどす勢いで、あふれて来る血のにおいと、——そういう想像は、おのずから太郎の手を、葛つづらま巻きの太刀の柄つかへのばさせた。

「うそじや。うそじや。おぬしは、いつもわしを殺そうと思うている。——やい、たれか助けてくれ。人殺しじや。親殺しじや。」

猪熊いのくまの爺おじは、相手の心を見通したのか、またひとしきりはね起きようとして、すまい

ながら、必死になって、わめき立てた。

「おぬしは、なんで阿濃あこぎを、あのような目にあわせた。さあそのしさいを言え。言わねば……」

「言う。言う。——言うがな。言つたあとでも、おぬしの事じや。殺さないものでも、なかろう。」

「うるさい。言うか、言わぬか。」

「言う。言う。言う。が、まず、そこを放してくれ。これでは、息がつまって、口がきけぬわ。」

太郎は、それを耳にもかけないように、殺氣立つた声で、いらだたく繰り返した。

「言うか、言わぬか。」

「言う。」と、猪熊いのくまの爺おじは、声をふりしぼって、まだはね返そうと、もがきながら、

「言うともな。あれはただ、わしが薬をのましようと思うたのじや。それを、あの阿濃あこぎめが、どうしても飲みおらぬ。されば、ついわしも手荒な事をした。それだけじや。

いや、まだある。薬をこしらえおつたのは、おばばじや。わしの知つた事ではない。」

「薬？　では、墮胎おろしくすり薬だな。いくら阿呆おろでも、いやがる者をつかまえて、非道な事をす



るおやじだ。」

「それ見い。言えと言うから、言え、なおおぬしは、わしを殺す気になるわ。人殺し。極道。」

「たれがおぬしを殺すと言った？」

「殺さぬ気なら、なぜおぬしこそ、太刀の柄へ手をかけているのじゃ。」

老人は、汗にぬれたはげ頭を仰向けて、上目に太郎を見上げながら、口角に泡をためて、こう叫んだ。太郎は、はっと思つた。殺すなら、今だという気が、心頭をかすめて、一閃する。彼は思わず、ひざに力を入れながら、太刀の柄を握りしめて、老人の頸のあたりをじつと見た。わずかに残つた胡麻塩の毛が、後頭部を半ばおつた下に、二筋の腱が、赤い鳥肌の皮膚のしわを、そこだけ目立たないように、のばしている。——太郎は、その頸を見た時に、不思議な憐憫を感じだした。

「人殺し。親殺し。うそつき。親殺し。親殺し。」

猪熊の爺は、つづけさまに絶叫しながら、ようやく、太郎のひぎの下からはね起きた。はね起きると、すばやく倒れた遣戸を小盾にとつて、きよろきよろ、目を左右にくぼりながら、すきさえあれば、逃げようとする。——その一面に赤く地ばれのした、目も鼻もゆ

がんでいる、狡猾こうかつらしい顔を見ると、太郎は、今さらのように、殺さなかったのを後悔した。が、彼はおもむろに太刀の柄から手を離すと、彼自身をあわれむように苦笑をくちびるに浮かべながら、手近の古畳の上へしぶしぶ腰をおろした。

「おぬしを殺すような太刀は、持たぬわ。」

「殺せば、親殺しじやて。」

彼の様子に安心した、猪熊いのくまの爺おじは、そろそろ遺戸やりどの後ろから、にじり出ながら、太郎のすわったのと、すじかいに敷いた畳の上へ、自分も落ちつかない尻しりをすえた。

「おぬしを殺して、なんで親殺しになる？」

太郎は、目を窓にやりながら、吐き出すように、こう言った。四角に空を切りぬいた窓の中には、枇杷びわの木が、葉の裏表に日を受けて、明暗さまざまな緑の色を、ひっそりと風のないこずえにあつめている。

「親殺しじやよ。——なぜと言えばな。沙金しゃきんは、わしの義理の子じや。されば、つながるおぬしも、子ではないか。」

「じゃ、その子を妻めにしているおぬしは、なんだ。畜生かな、それともまた、人間かな。」  
老人は、さっきの争いに破れた、水干すいかんの袖そでを気にしながら、うなるような声で言った。

「畜生でも、親殺しはすまいて。」

太郎は、くちびるをゆがめて、あざわらった。

「相変わらず、達者な口だて。」

「何が達者な口じや。」

猪熊いのくまの爺おじは、急に鋭く、太郎の顔をにらめたが、やがてまた、鼻で笑いながら、

「されば、おぬしにきくがな、おぬしは、このわしを、親と思うか。いやさ、親と思う事ができるかよ。」

「きくまでもないわ。」

「できまいな」

「おお、できない。」

「それが手前勝手じや。よいか。沙金しやきんはおばばのつれ子じやよ。が、わしの子ではない。されば、おばばにつれそうわしが、沙金を子じやと思わねばならぬなら、沙金につれそうおぬしも、わしを親じやと思わねばなるまいがな。それをおぬしは、わしを親とも思わぬ。思わぬどころか、場合によつては、打ち打ちようちやく擲やくもするではないか。そのおぬしが、わしにばかり、沙金を子と思えとは、どういうわけじや。妻めにして悪いとは、どういうわけじ

や。沙金を妻にするわしが、畜生なら、親を殺そうとするおぬしも、畜生ではないか。」

老人は、勝ち誇った顔色で、しわだらけの人さし指を、相手につきつけるようにしながら、目をかがやかせて、しゃべり立てた。

「どうじゃ。わしが無理か、おぬしが無理か、いかなおぬしにも、このくらいな事はわかるであろう。それもわしとお婆とは、まだわしが、左兵衛府の下人さひようえふ げにんをしておったところからの昔なじみじゃ。お婆が、わしをどう思うたか、それは知らぬ。が、わしはお婆を懸想けそうしていた。」

太郎は、こういう場合、この酒飲みの、狡猾こうかつな、卑しい老人の口から、こういう昔語りを聞こうとは思っていなかった。いや、むしろ、この老人に、人並みの感情があるかどうか、それさえ疑わしいと、思っていた。懸想した猪熊いのくまの爺おじと懸想された猪熊の婆と、——太郎は、おのずから自分の顔に、一脈の微笑が浮かんで来るのを感じたのである。

「そのうちに、わしはお婆に情人おとしこがある事を知ったがな。」

「そんなら、おぬしはきらわれたのじゃないか。」

「情人おとしこがあつたとて、わしのきらわれたという、証拠にはならぬ。話の腰を折るなら、も

うやめじや。」

猪熊の爺は、真顔になって、こう言ったが、すぐまた、ひぎをすすめて、太郎のほうへにじり寄りながら、つばをのみのみ、話しだした。

「そのうちに、おばばがその情人おとこの子をはらんだて。が、これはなんでもない。ただ、驚いたのは、その子を生むと、まもなく、おばばの行き方かたが、わからなくなって、しもうた事じゃ。人に聞けば、疫病えやみで死んだの、筑紫つくしへ下つたのと言いおるわ。あとで聞けば、なんの、奈良坂ならざかのしるべのもとへ、一時身を寄せておったげじや。が、わしは、それからにわかに、この世が味気なくなつてしもうた。されば、酒も飲む、賭博ばくちも打つ。ついには、人に誘われて、まんまと強盗にさえ身をおとしたがな。綾あやを盗めば綾につけ、錦にしきを盗めば錦につけ、思い出すのは、ただ、おばばの事じゃ。それから十年たち、十五年たつて、やつとまたおばばに、めぐり会つてみれば——」

今では全く、太郎と一つ畳にすわりこんだ老人は、ここまで話すと、次第に感情がたかぶつて来たせいか、しばらくはただ、涙に頬ほおをぬらしながら、口ばかり動かして、黙っている。太郎は、片目をあげて、別人を見るように、相手のべそをかいだ顔をながめた。

「めぐり会つてみれば、おばばは、もう昔のおばばではない。わしも、昔のわしでなかつ

たのじや。が、つれている子の沙金しゃきんを見れば、昔のおばばがまた、帰つて来たかと思うほど、おもかげがよう似ているて。されば、わしはこう思うた。今、おばばに別れれば、沙金ともまた別れなければならぬ。もし沙金と別れまいと思えば、おばばといっしょになるばかりじや。よし、ならば、おばばを妻めにしよう——こう思い切つて、持ったのが、この猪熊いのくまの瘦世帯やせじよたいじや。……」

猪熊いのくまの爺おじは、泣き顔を、太郎の顔のそばへ持つて来ながら、涙声でこう言つた。すると、その拍子に、今まで氣のつかなかつた、酒くさいにおいが、ぷんとする。——太郎は、あつけにとられて、扇のかげに、鼻をかくした。

「されば、昔からきょうの日まで、わしが命にかけて思うたのは、ただ、昔のおばば一人ぎりじや。つまりは今の沙金しゃきん一人ぎりじやよ。それを、おぬしは、何かにつけて、わしを畜生じやなどと言う。このおやじがおぬしは、それほど憎いのか。憎ければ、いつそ殺すがよい。今ここで、殺すがよい。おぬしに殺されれば、わしも本望じや。が、よいか、親を殺すからは、おぬしも、畜生じやぞよ。畜生が畜生を殺す——これは、おもしろかう。」

涙がかわくに従つて、老人はまた、元のように、ふて腐れた悪態あくたいをつきながら、しわ

だらけの人さし指をふり立てた。

「畜生が畜生を殺すのじや。さあ殺せ。おぬしは、卑怯者ひきようものじやな。ははあ、さつき、わしが阿濃あこぎに薬をくれようとしたら、おぬしが腹を立てたのを見ると、あの阿呆あほうをはらませたのも、おぬしらしいぞ。そのおぬしが、畜生でのうて、何が畜生じや。」

こう言いながら、老人は、いちはやく、倒れた遺戸やりどの向こうへとびのいて、すわと言え、逃げようとするけはいを示しながら、紫がかつた顔じゅうの造作ぞうさくを、憎々しくゆがめて見せる。——太郎は、あまりの雑言ぞうごんに堪えかねて、立ち上がりながら、太刀の柄つかへ手をかけたが、やめて、くちびるを急に動かすとたちまち相手の顔へ、一塊の痰たんをはきかけた。

「おぬしのような畜生には、これがちようど、相当だわ。」

「畜生呼ばわりは、おいてくれ。沙金しゃきんは、おぬしばかりの妻めかよ。次郎殿の妻めでもないか。されば、弟の妻めをぬすむおぬしもやはり、畜生じや。」

太郎は、再びこのおやじを殺さなかった事を後悔した。が、同時にまた、殺そうという気の起こる事を恐れもした。そこで、彼は、片目を火のようにひらめかせながら、黙って、席を蹴けつて去ろうとする——すると、その後ろから、猪熊いのくまの爺おじはまた、指をふりふり、

罵詈ばりを浴びせかけた。

「おぬしは、今の話をほんとうだと思ふか。あれは、みんなうそじや。ばばが昔なじみやというのも、うそなら、沙金しゃきんがおばばに似ているというのもうそじや。よいか。あれは、みんなうそじや。が、とがめたくも、おぬしはとがめられまい。わしはうそつきじやよ。畜生じやよ。おぬしに殺されそくなつた、人でなしじやよ。……」

老人は、こう唾罵だばを飛ばしながら、おいおい、呂律ろれつがまわらなくなつて来た。が、なおも濁つた目に懸命の憎惡ぞうおを集めながら、足を踏み鳴らして、意味のない事を叫びつづける。

——太郎は、堪えがたい嫌惡けんおの情に襲われて、耳をおおうようにしながら、  
そうそう 々、猪いのく  
 熊まの家を出た。外には、やや傾きかかった日がさして、相変わらずその中を、燕つばくらが軽々と流れている。——

「どこへ行こう。」

外へ出て、思わずこう小首を傾けた太郎は、ふとさつきまでは、自分が沙金しゃきんに会うつもりで、猪熊へ来たのに、気がついた。が、どこへ行ったら、沙金に会えるという、当てもない。

「ままよ。羅生門らしやうもんへ行つて、日の暮れるのも待とう。」



彼のこの決心には、もちろん、いくぶん沙金に会えるという望みが、隠れている。沙金  
 は、日ごろから、強盗にはいる夜には、好んで、男装束おとこしょうぞくに身をやつした。その装束  
 や打ち物は、みな羅生門の樓上に、皮子かわごへ入れてしまつてある。——彼は、心をきめて、  
 小路こうじを南へ、大またに歩きだした。

それから、三条を西へ折れて、耳敏川みみとがわの向こう岸を、四条まで下つてゆく——ちよう  
 ど、その四条の大路おおじへ出た時の事である。太郎は、一町いっちようを隔てて、この大路を北へ、  
 立本寺りゆうほんじの築土ついにしの下を、話しながら通りかかる、二人の男女なんによの姿を見た。

朽ち葉色の水干すいかんとうす紫の衣きぬとが、影を二つ重ねながら、はればれした笑い声をあと  
 に残して、小路こうじから小路へ通りすぎる。めまぐるしい燕つばくらの中に、男の黒鞆くろぎやの太刀たちが、き  
 らりと日に光つたかと思うと、二人はもう見えなくなつた。

太郎は、額を曇らせながら、思わず道ばたに足をとめて、苦しそうにつぶやいた。  
 「どうせみんな畜生だ。」

ふけやすい夏の夜は、早くも亥の上刻に迫つて来た。――

月はまだ上らない。見渡す限り、重苦しいやみの中に、声もなく眠っている京の町は、加茂川の水面がかすかな星の光をうけて、ほのかに白く光っているばかり、大路小路の辻々にも、今はようやく灯影が絶えて、内裏といひ、すすき原といひ、町家といひ、ことごとく、静かな夜空の下に、色も形もおぼろげな、ただ広い平面を、ただ、際限もなく広がっている。それがまた、右京左京の区別なく、どこも森閑と音を絶つて、たまに耳にはいるのは、すじかに声を飛ばすほととぎすのほかに、何もない。もしその中に一点でも、人なつかしい火がゆらめいて、かすかなものの声が聞こえたとすれば、それは、香の煙のたちこめた大寺の内陣で、金泥も緑青も所斑な、孔雀明王の画像を前に、常燈明の光をたのむ参籠の人々か、さもなれば、四条五条の橋の下で、短夜を芥火の影にぬすむ、こじき法師の群れであろう。あるいはまた、夜な夜な、往来の人をおびやかす朱雀門の古狐が、瓦の上、草の間に、ともすともなくともすという、鬼火のたぐいであるかもしれない。が、そのほかは、北は千本、南の鳥羽街道の境を尽くして、蚊やりの煙のにおいのする、夜色の底に埋もれながら、河原よもぎの葉を動かす、微風もまるで知らないように、沈々としてふけている。

その時、王城の北、朱雀大路すざくおおじのはずれにある、羅生門らしやうもんのほとりには、時ならない弦打ちの音が、さながら蝙蝠こうもりの羽音のように、互いに呼びつ答えつして、あるいは一人、あるいは三人、あるいは五人、あるいは八人、怪しげないでたちをしたものの姿が、次第にどこからか、つどつて来た。おぼつかない星明かりに透かして見れば、太刀たちをはくもの、矢を負うもの、斧おのを執るもの、戟ほこを持つもの、皆それぞれ、得物えものに身を固めて、脛布藁はばきわらう沓ずの装いもかいがいしく、門の前に渡した石橋へ、むらむらと集まって、列を作る――と、まつさきには、太郎がいた。それにつづいて、さっきの争いも忘れたように、猪熊いのくまの爺おじが、物々しく鉾ほこの先を、きらりと暗やみにひらめかせる。続いて、次郎、猪熊いのくまのぼば、少し離れて、阿濃あこぎもいる。それにかこまれて、沙金しゃきんは一人、黒い水干すいかんに太刀たちをはいて、胡籙やなぐいを背に弓杖ゆんづえをつきながら、一同を見渡して、あでやかな口を開いた。――

「いいかい。今夜の仕事は、いつもより手ごわい相手なんだからね。みなそのつもりで、いておくれ。さしずめ十五六人は、太郎さんといっしょに、裏から、あとわたしといっしょに、表からはいつてもらおう。中でも目ぼしいのは、裏の厩うまやにいる陸奥出みちのくでの馬だね。これは、太郎さん、あなたに頼んでおくわ。よくつて。」

太郎は、黙つて星を見ていたが、これを聞くと、くちびるをゆがめながら、うなずいた。

「それから断わっておくが、女子供を質になんぞとっては、いけないよ。あとの始末がめんどうだからね。じゃ、人数にんずがそろったら、そろそろ出かけよう。」

こう言つて、沙金は弓をあげて、一同をさしまねいたが、しょんぼり、指をかんで立っている、阿濃を顧みると、またやさしくことばを添えた。

「じゃ、お前はここで、待つていておくれ。一刻いつときか二刻ふたときで、皆帰つてくるからね。」

阿濃は、子供のように、うつとり沙金の顔を見て、静かに合点がてんした。

「されば、行ゆこう。ぬかるまいぞ、多襄丸たじょうまる。」

猪熊いのくまの爺おじは、戟ほこをたばさみながら、隣にいる仲間をふり返った。蘇芳染すおうぞめの水干すいかんを

着た相手は、太刀たちのつばを鳴らして、「ふふん」と言つたまま、答えない。そのかわりに、斧おのをかついだ、青ひげのさわやかな男が、横あいから、口を出した。

「おぬしこそ、また影法師なぞにおびえまいぞ。」

これと共に、二十三人の盗人どもは、ひとしく忍び笑いをもらしながら、沙金しゃきんを中に、雨雲のむらがるごとく、一団の殺気をこめて、朱雀大路すざくおおじへ押し出すと、みぞをあふれた泥ど水ろみずが、くぼ地くぼ地へ引かれるようにやみにまぎれて、どこへ行つたか、たちまちのうちに、見えなくなつた。……

あとには、ただ、いつか月しろのした、うす明るい空にそむいて、羅生門らしやうもんの高い葺いらかが、寂然せきぜんと大路を見おろしているばかり、またしてもほととぎすの、声がおちこちに断続して、今まで七丈五級の大石段に、たたずんでいた阿濃あこぎの姿も、どこへ行つたか、見えなくなった。――が、まもなく、門上の楼に、おぼつかない灯ひがともって、窓が一つ、かたりとあくど、その窓から、遠い月の出をながめている、小さな女の顔が出た。阿濃は、こうして、次第に明るくなつてゆく京の町を、目の下に見おろしながら、胎児の動くのを感じること、ひとりうれしそうに、ほほえんでいるのである。

## 七

次郎は、二人の侍と三頭の犬とを相手にして、血にまみれた太刀たちをふるいながら、小路こうじを南へ二三町、下るともなく下つて来た。今は沙金しゃきんの安否を気づかっている余裕もない。侍は衆をたのんで、すきまもなく切りかける。犬も毛の逆立った背をそびやかして、前後をきらわず、飛びかかった。おりからの月の光に、往来は、ほのかながら、打つ太刀をたがわせないほどに、明るくなっている。――次郎は、その中で、人と犬とに四方を囲まれ

ながら、必死になつて、切りむすんだ。

相手を殺すか、相手に殺されるか、二つに一つより生きる道はない。彼の心には、こういう覚悟と共に、ほとんど常軌を逸した、凶猛な勇氣が、刻々に力を増して来た。相手の太刀を受け止めて、それを向こうへ切り返しながら、足もとを襲おうとする犬を、とつさに横へかわしてしまふ。——彼は、この働きをほとんど同時にした。そればかりではない。どうかするとその拍子に切り返した太刀を、逆にまわして、後ろから来る犬の牙を、防がなければならぬ事さえある。それでもさすがにいつか傷をうけたのであろう。月明かりにすかして見ると、赤黒いものが一すじ、汗ににじんで、左の小鬢こびんから流れている。が、死に身になった次郎には、その痛みも氣にならない。彼は、ただ、色を失つた額に、ひいでた眉まゆを一文字にひそめながら、あたかも太刀たちに使われる人のように、烏帽子えぼしも落ち、水す干いかんも破れたまま、縦横やいばに刃を交えているのである。

それがどのくらい続いたか、わからない。が、やがて、上段に太刀をふりかざした侍の一人が、急に半身を後ろへそらせて、けたたましい悲鳴をあげたと思うと、次郎の太刀は、早くもその男の脾腹ひばらを斜めに、腰のつがいまで切りこんだのであろう。骨を切る音が鈍く響いて、横に薙ないだ太刀の光が、うすやみをやぶつてきらりとする。——と、その太刀が

宙におどつて、もう一人の侍の太刀を、ちようと下から払つたと見る間に、相手は肘をし  
 たたか切られて、やにわに元来たほうへ、敗走した。それを次郎が追いつがりに、切  
 ろうとしたのと、狩犬の一頭が鞠のように身をはずませて、彼の手もとへかぶりついたの  
 とが、ほとんど、同時の働きである。彼は、一足あとへとびのきながら、ふりむかつた血  
 刀の下に、全身の筋肉が一時にゆるむような気落ちを感じて、月に黒く逃げてゆく相手の  
 後ろ姿を見送つた。そうしてそれと共に、悪夢からさめた人のような心もちで、今自分の  
 いる所が、ほかならない立本寺の門前だという事に気がついた。――

これから半刻ばかり以前の事である。藤判官の屋敷を、表から襲つた偷盗の一  
 群は、中門の右左、車宿りの内外から、思いもかけず射出した矢に、まず肝を破られた。  
 まつさきに進んだ真木島の十郎が、太腿を篋深く射られて、すべるようにどうと倒れ  
 る。それを始めとして、またたく間に三三人、あるいは顔を破り、あるいは臂を傷つけて、  
 あわただしく後ろを見せた。射手の数は、もちろん何人だかわからない。が、染め羽白羽  
 のとがり矢は、中には物々しい鏑の音さえ交えて、またひとしきり飛んで来る。後ろに下  
 がつていた沙金でさえ、ついには黒い水干の袖を斜めに、流れ矢に射通された。

「お頭にけがをさすな。射ろ。射ろ。味方の矢にも、鏑があるぞ。」

交野<sup>かたの</sup>の平六<sup>へいろく</sup>が、斧<sup>おの</sup>の柄<sup>え</sup>をたたいて、こうののしると、「おう」という答えがあつて、たちまち盗人の中からも、また矢叫<sup>やたけ</sup>びの聲<sup>こゑ</sup>が上がり始める。太刀<sup>たち</sup>の柄<sup>つか</sup>に手をかけて、やはり後ろに下がっていた次郎は、平六のこのことばに、一種の苛<sup>かし</sup>責<sup>やく</sup>を感じながら、見ないようにして沙金の顔を横からそつとのぞいて見た。沙金は、この騒ぎのうちにも冷然とたたずみながら、ことさら月の光にそむきいて、弓<sup>ゆんづえ</sup>杖<sup>え</sup>をついたまま、口角の微笑もかくさず、じつと矢の飛びかうのを、ながめている。——すると、平六が、またいら立たしい声を上げて、横あいから、こう叫んだ。

「なぜ十郎を捨てておくのじや。おぬしたちは矢玉が恐ろしゆうて、仲間を見殺しにする気かよ。」

太腿<sup>ふともも</sup>を縫われた十郎は、立ちたくも立てないのであろう、太刀<sup>たち</sup>を杖<sup>つえ</sup>にして居ざりながら、ちようど羽根をぬかれた鴉<sup>からす</sup>のように、矢を避け避け、もがいている。次郎は、それを見ると、異様な戦慄<sup>せんりつ</sup>を覚えて、思わず腰の太刀をぬき払った。が、平六はそれを知ると、流し目にじろりと彼の顔を見て、

「おぬしは、お頭<sup>かしら</sup>に付き添うていればよい。十郎の始末は、小盗人<sup>こぬすびと</sup>でたくさんじゃ。」



次郎は、このことばに皮肉な侮蔑ぶべつを感じて、くちびるをかみながら、鋭く平六の顔を見返した。——すると、ちょうどそのとたんである。十郎を救おうとして、ばらばらと走り寄った、盗人たちの機先を制して、耳をつんざく一いっせい声の角つのを合図に、粉々として乱れる矢の中を、門の内から耳のとがった、牙きばの鋭い、狩犬が六七頭すさまじいうなり声を立てながら、夜目にも白くほこりを巻いて、まっしぐらに衝ついて出た。続いてそのあとから十人十五人、手に手に打ち物を取った侍が、先を争って屋敷の外へ、ひしめきながらあふれて来る。味方ももちろん、見てはいない。斧おのをふりかざした平六を先に立てて、太刀や鉾ほこが林のように、きらめきながら並んだ中から、人とも獣けものともつかない声を、たれとも知らずわつと上げると、始めのひるんだけしきにも似ず一度に備えを立て直して、猛然として殺到する。沙しゃ金きんも、今は弓にたかうすびようの矢をつがえて、まだ微笑を絶たない顔に、一脈の殺気を浮かべながら、すばやく道ばたの築土つじのこわれを小楯こだてにとって、身がまえた。

やがて敵と味方は、見る見るうちに一つになって、気の違ったようにわめきながら、十郎の倒れている前後をめぐって、無二無三に打ち合い始めた。その中にまた、狩犬がけたましく、血に飢えた声を響かせて、戦いはいずれが勝つとも、しばらくの間はわからな

い。そこへ一人、裏へまわった仲間の一人が、汗と埃ほこりとにまみれながら、二三か所薄手を負うた様子で、血に染まったままかけつけた。肩にかついだ太刀の刃のこぼれでは、このほうの戦いも、やはり存外手痛かつたらしい。

「あつちは皆ひき上げますぜ。」

その男は、月あかりにすかしながら、沙金の前へ来ると、息を切らし切らし、こう言つた。

「なにしろ肝腎かんじんの太郎さんが、門の中で、やつらに囲まれてしまったという騒ぎでしてな。」

沙金しゃきんと次郎とは、うす暗い築土つじの影の中で、思わず目と目を見合わせた。

「囲まれて、どうしたえ。」

「どうしたか、わかりません。が、事によると、——まあそれもあの人の事だから、万々ばんばん大丈夫だろうと思ひますがな。」

次郎は、顔をそむけながら、沙金のそばを離れた。が、小盗人こぬすびとはもちろんそんな事は、気にとめない。

「それにおじじやお婆ばまで、手を負つたようでした。あのぶんじや殺されたやつも、四

五人はありましょう。」

沙金はうなずいた。そうして次郎のあとから追いかけるように、険のある声で、

「じゃ、わたしたちもひき上げましょう。次郎さん、口笛を吹いてちようだい。」と言った。

次郎は、あらゆる表情が、凝り固まったような顔をしながら、左手の指を口へ含んで、鋭く二声、口笛の音を飛ばせた。これが、仲間にだけ知られている、引き揚げの時の合図である。が、盗人たちは、この口笛を聞いても、踵くびすをめぐらす様子がない。（実は、人と犬にとりかこまれてめぐらすだけの余裕がなかったせいであろう。）口笛の音は、蒸し暑い夜の空気を破つて、むなしく小路こうじの向こうに消えた。そうしてそのあとには、人の叫ぶ声と、犬のほえる声と、それから太刀たちの打ち合う音とが、はるかな空の星を動かして、いつそう騒然と、立ちのぼった。

沙金しゃきんは、月を仰ぎながら、稲妻のごとく眉まゆを動かした。

「しかたがないわね。じゃ、わたしたちだけ帰りましょう。」

そういう話のまだ終わらないうちに、そうして、次郎がそれを聞かないもののように、再び指を口に含んで相図を吹こうとした時に、盗人たちの何人かが、むらむらと備えを乱

して、左右へ分かれた中から、人と犬とが一つになって、二人の近くへ迫つて来た。——  
と思うと、沙金ゆがえの手に弓返りの音がして、まっさきに進んだ白犬が一頭、たかうすびよう  
の矢に腹を縫われて、苦鳴と共に、横に倒れる。見る間に、黒血がその腹から、斑々はんぱんと  
して砂にたれた。が、犬に続いた一人の男は、それにもおじず、太刀をふりかざして、横  
あいから次郎に切つてかかる。その太刀が、ほとんど無意識に受けとめた、次郎の太刀の  
刃を打つて、鏘然そうぜんとした響きと共に、またたく間、火花を散らした。——次郎はその時、  
月あかりに、汗にぬれた赤ひげと切り裂かれた樺かば桜ざくらの直垂ひたたれとを、相手の男に認めた  
のである。

彼は直下じきげに、立本寺りゆうほんじの門前を、ありありと目に浮かべた。そうして、それと共に、恐  
ろしい疑惑が、突然として、彼を脅かした。沙金しゃきんはこの男と腹を合わせて、兄のみなら  
ず、自分をも殺そうとするのではあるまいか。一髪かんの間にこういう疑いをいだいた次郎は、  
目の前が暗くなるような怒りを感じて、相手の太刀たちの下を、脱兎だつとのごとく、ぐぐりぬける  
と、両手に堅く握つた太刀を、奮然として、相手の胸に突き刺した。そうして、ひとたま  
りもなく倒れる相手の男の顔を、したたか藁沓わらうずでふみにじった。

彼は、相手の血が、生暖かく彼の手にかかったのを感じた。太刀の先が肋あばらの骨に触れて、

強い抵抗を受けたのを感じた。そうしてまた、断末魔の相手が、ふみつけた彼の藁沓わらうずに、下から何度もかみついたのを感じた。それが、彼の復讐ふくしゅう心に、快い刺激を与えたのは、もちろんである。が、それにつれて、彼はまた、ある名状しがたい心の疲労に、襲われた。もし周囲が周囲だったら、彼は必ずそこに身を投げ出して、飽くまで休息をむさぼった事であろう。しかし、彼が相手の顔をふみつけて、血のしたたる太刀を向こうの胸から引きぬいているうちに、もう何人かの侍は、四方から彼をとり囲んだ。いや、すでに後ろから、忍びよった男の鋒ほこは、危きうく鋒きつぎを、彼の背に擬している。が、その男は、不意に前へよろめくと、鋒の先に次郎の水干すいかんの袖そでを裂いて、うつむけにがくりと倒れた。たかうすびよりの矢が一筋、颯然さつぜんと風を切りながら、ひとゆりゆつて後頭部へ、ぐさと鋭深のぶかく立ったからである。

それからのちの事は、次郎にも、まるで夢のようにしか思われない。彼はただ、前後左右から落ちて来る太刀たちの中に、獣のようなり声を出して、相手を選まず渡り合った。周囲に沸き返っている、声とも音ともつかない物の響きと、その中に出没する、血と汗とにまみれた人の顔と——そのほかのものは、何も目にはいらない。ただ、さすがに、あとにのこして来た沙金しゃきんの事が、太刀からほとばしる火花のように、時々心にひらめいた。

が、ひらめいたと思ううちに、刻々迫ってくる生死の危急が、たちまちそれをかき消してしまう。そうして、そのあとにはまた、太刀音と矢たけびとが、天をおおう蝗いなごの羽音のよ  
うに、築土つじにせかれた小路こうじの中で、とめどもなくわき返った。——次郎は、こういう勢いに促されて、いつか二人の侍と三頭の犬とに追われながら、小路を南へ少しずつ切り立てられて来たのである。

が、相手の一人を殺し、一人を追いはらったあとで、犬だけなら、恐れる事もないと思つたのは、結局次郎の空だのみにすぎなかった。犬は三頭が三頭ながら、大きさも毛なみも一対な茶まだらの逸物いちもつで、子牛もこれにくらべれば、大きい事はあつても、小さい事はない。それが皆、口のまわりを人間の血にぬらして、前に変わらず彼の足もとへ、左右から襲いかかった。一頭の頤あごを蹴返すと、一頭が肩先へおどりかかる。それと同時に、一頭の牙きばが、すんでに太刀たちを持った手を、かもうとした。とまた、三頭とも巴ともえのように、彼の前後に輪を描いて、尾を空ざまに上げながら、砂のにおいをかぐように、頤あごを前足へすりつけて、びようびようとほえ立てる。——相手を殺したのに、気のゆるんだ次郎は、前よりもいっそう、この狩犬の執拗しゆうねい働きに悩まされた。

しかも、いら立てば立つほど、彼の打つ太刀は皆空くうを切って、ややともすれば、足場を

失わせようとする。犬は、そのすきに乘じて、熱い息を吐きながら、いよいよ休みなく肉薄した。もうこうなつては、ただ、窮余の一策しか残っていない。そこで、彼は、事によつたら、犬が追ひあぐんで、どこかに逃げ場ができるかもしれないという、一縷<sup>いちる</sup>の望みにたよりながら、打ちはずした太刀を引いて、おりから足をねらつた犬の背を危うく向こうへとび越えると、月の光をたよりにして、ひた走りに走り出した。が、もとよりこの企ても、しよせんはおぼれようとするものが、藁<sup>わら</sup>でもつかむのと變わりはない。犬は、彼が逃げるのを見ると、ひとしくきりりと尾を巻いて、あと足に砂を蹴<sup>け</sup>上げながら真一文字に追いつがつた。

が、彼のこの企ては、単に失敗したというだけの事ではない。実はそれがために、かえつて虎口<sup>こうこう</sup>にはいるような事ができたのである。——次郎は立本寺<sup>りゅうほんじ</sup>の辻<sup>つじ</sup>をきわどく西へ切れて、ものの二町と走るか走らないうちに、たちまち行く手の夜を破つて、今自身を追っている犬の声より、より多くの犬の声が、耳を貫ぬいて起こるのを聞いた。それから、月に白<sup>しろ</sup>んだ小路<sup>こうじ</sup>をふさいで、黒雲に足のはえたような犬の群れが、右往左往に入り乱れて、餌食<sup>えじき</sup>を争っているさまが見えた。最後に——それはほとんど寸刻のいとまもなかったくらいである。すばやく彼を駆けぬけた狩犬の一頭が、友を集めるように高くほえると、そこ

に狂つていた犬の群れは、ことごとく相呼び相答えて、一度にぎんぎん 々の声をあげながら、見る間に彼を、その生きて動く、なまぐさい毛皮の渦巻うずまきの中へ巻きこんだ。深夜、この小路に、こうまで犬の集まつていたのは、もとよりいつもある事ではない。次郎は、この廃都をわが物顔に、二十と頭をそろえて、血のにおいに飢えて歩く、獐どう猛もうな野犬の群れが、ここに捨ててあつた疫病えやみの女を、宵よいのうちから餌食にして、互いに牙きばをかみながら、そのちぎれちぎれな肉や骨を、奪い合つているところへ、来たのである。

犬は、新しい餌食を見ると、一瞬のいとまもなく、あらしに吹かれて飛ぶ稲穂のように、八方から次郎へ飛びかかった。たくましい黒犬が、太刀たちの上をおどり越えようと、尾のない狐きつねに似た犬が、後ろから来て、肩をかすめる。血にぬれた口ひげが、ひやりと頬ほおにさわつたかと思うと、砂だらけな足の毛が、斜めに眉まゆの間をなでた。切ろうにも突こうにも、どれと相手を定める事ができない。前を見ても、後ろを見ても、ただ、青くかがやいている目と、絶えずあえいでいる口とがあるばかり、しかもその目とその口が、数限りもなく、道をうずめて、ひしひしと足もとに迫つて来る。――次郎は、太刀たちを回しながら、急に、猪熊いのくまのばばの話を思い出した。「どうせ死ぬのなら一思いに死んだほうがいい。」彼は、そう心に叫んで、いさぎよく目をつぶつたが、喉のどをかもうとする犬の息が、暖かく顔へか



かると、思わずまた、目をあいて、横なぐりに太刀をふるった。何度それを繰り返したか、わからない。しかし、そのうちに、腕の力が、次第に衰えて来たのであろう、打つ太刀が、一太刀ごとに重くなつた。今では踏む足さえ危うくなつた。そこへ、切つた犬の数よりも、はるかに多い野犬の群れが、あるいは<sup>すすきはら</sup>芒原の向こうから、あるいは<sup>つじ</sup>築土のこわれをぬけて、続々として、つどつて来る。――

次郎は、絶望の目をあげて、天上の小さな月を一瞥<sup>いちべつ</sup>しながら、太刀を両手にかまえたまま、兄の事や<sup>しやきん</sup>沙金の事を、一度に<sup>せつか</sup>石火のごとく、思い浮かべた。兄を殺そうとした自分<sup>しごく</sup>が、かえつて犬に食われて死ぬ。これより至極な天罰はない。――そう思うと、彼の目には、おのずから涙が浮かんできた。が、犬はその間も、用捨はしない。さっきの狩犬の一頭が、ひらりと茶まだらな尾をふるつたかと思うと、次郎はたちまち左の<sup>ふともも</sup>太腿に、鋭い牙<sup>きば</sup>の立つたのを感じた。

するとその時である。月にほのめいた両京二十七坊の夜の底から、かまびすしい犬の声を<sup>かつかつ</sup>圧してはるかに<sup>ばてい</sup>憂々たる馬蹄の音が、風のように空へあがり始めた。……

しかしその間も阿濃<sup>あこぎ</sup>だけは、安らかな微笑を浮かべながら、羅生門<sup>らしやうもん</sup>の楼上にたたずんで、遠くの月の出をながめている。東山の上が、うす明るく青んだ中に、ひでりにやせた月は、おもむろにさみしく、中空<sup>なかぞら</sup>に上つてゆく。それにつれて、加茂川にかかっている橋が、その白々<sup>しらじら</sup>とした水光<sup>すずびか</sup>りの上に、いつか暗く浮き上がって来た。

ひとり加茂川ばかりではない。さつきまでは、目の下に黒く死人<sup>しびと</sup>のにおいを蔵していた京の町も、わずかの間に、つめたい光の鍍金<sup>めつき</sup>をかけられて、今では、越<sup>こし</sup>の国の人が見るという蜃気楼<sup>かいやぐら</sup>のように、塔の九輪や伽藍<sup>がらん</sup>の屋根を、おぼつかなく光らせながら、ほのかな明るみと影との中に、あらゆる物象を、ぼんやりとつつんでいる。町をめぐる山々も、日中のほとぼりを返しているのであらう、おのずから頂きをおぼろげな月明かりにぼかしながら、どの峰も、じつと物を思つてでもいるように、うすい靄<sup>もや</sup>の上から、静かに荒廃した町を見おろしている——と、その中で、かすかに凌霄花<sup>のうぜんかずら</sup>のにおいがした。門の左右を埋<sup>うず</sup>める藪<sup>やぶ</sup>のところどころから、簇<sup>そうそう</sup>々とするのをのばしたその花が、今では古びた門の柱にまといついて、ずり落ちそうになった瓦<sup>かわら</sup>の上や、蜘蛛<sup>くも</sup>の巣をかけた檻<sup>たるき</sup>の間へ、はい上がったのがあるからであらう。……

窓によりかかった阿濃あこぎは、鼻の穴を大きくして、思い入れ凌霄花のおいを吸いながら、なつかしい次郎の事を、そうして、早く日の目を見ようとして、動いている胎児の事を、それからそれへと、とめどなく思いつづけた。——彼女は双親ふたおやを覚えていない。生まれたる所の様子さえ、もう全く忘れている。なんでも幼い時に一度、この羅生門らしやうもんのような、大きな丹塗にぬりの門の下を、たれかに抱くか、負われかして、通ったという記憶がある。が、これももちろん、どのくらいほんとうだか、確かな事はわからない。ただ、どうにかこうにか、覚えているのは、物心がついてからのちの事ばかりである。そうして、それがまた、覚えていないほうがよかつたと思うような事ばかりである。ある時は、町の子供にいじめられて、五条の橋の上から河原へ、さかさまにつき落とされた。ある時は、飢えにせまつてした盗みの咎とがで、裸のまま、地藏堂の梁うづばりへつり上げられた。それがふと沙金しゃきんに助けられて、自然とこの盗人の群れにはいったが、それでも苦しい目にあう事は、以前と少しも変わりが無い。白痴に近い天性を持つて生まれた彼女にも、苦しみを、苦しみとして感じる心はある。阿濃あこぎは猪熊いのくまのばばの氣に逆らつては、よくむごたしく打擲ちやうちやくされた。猪熊の爺おじには、酔つた勢いで、よく無理難題を言いかけられた。ふだんは何かといったわつてくれる沙金しゃきんでさえ、癩かんにさわると、彼女の髪の毛をつかんで、ずるずる引きずりまわ

す事がある。まして、ほかの盗人たちは、打つにもたたくにも、用捨はない。阿濃は、そのたびにいつもこの羅生門らしやうもんの上へ逃げて来ては、ひとりでしくしく泣いていた。もし次郎が来なかつたら、そうして時々、やさしいことばをかけてくれなかつたら、おそろくとうにこの門の下へ身を投げて、死んでしまっていた事であろう。

煤すすのようなものが、ひらひらと月にひるがえって、藁いらかの下から、窓の外をうす青い空へ上がった。言うまでもなく蝙蝠こうもり蝙蝠である。阿濃は、その空へ目をやって、まばらな星に、うつとりとながめ入った。——するとまたひとしきり、腹の子が、身動きをする。彼女は急に耳をすますようにして、その身動きに氣をつけた。彼女の心が、人間の苦しみをのがれようとして、もがくように、腹の子はまた、人間の苦しみを嘗なめに来ようとして、もがいている。が、阿濃は、そんな事は考えない。ただ、母になるといふ喜びだけが、そうして、また、自分も母になれるという喜びだけが、この凌霄花のうぜんかずらのにおいのように、さつきから彼女の心をいっぱいにしているからである。

そのうちに、彼女はふと、胎児が動くのは、眠れないからではないかと思ひだした。事によると、眠られないあまりに、小さな手や足を動かして、泣いてでもいるのかもしれない。「坊やはいいい子だね。おとなしく、ねんねしておいで、今にじき夜が明けるよ。」——

—彼女は、こう胎児にささやいた。が、腹の中の身動きは、やみそうでも、容易にやまない。そのうちに痛みさえ、どうやら少しずつ加わって来る。阿濃<sup>あこぎ</sup>は、窓を離れて、その下にうずくまりながら、結び燈台のうす暗い灯<sup>ひ</sup>にそむいて、腹の中の子を慰めようと、細い声で歌をうたった。

君をおきて

あだし心を

われ持たばや

なよや、末の松山

波も越えなむや

波も越えなむ

うろ覚えに覚えた歌の声は、灯<sup>ひ</sup>のゆれるのに従って、ふるえふるえ、しんとした楼の中に断続した。歌は、次郎が好んでうたう歌である。酔うと、彼は必ず、扇で拍子を取りながら、目をねむって、何度もこの歌をうたう。沙金<sup>しゃきん</sup>はよく、その節回しがおかしいと言つて、手を打って笑った。——その歌を、腹の中の子が、喜ばないというはずはない。

しかし、その子が、実際次郎の胤<sup>たね</sup>かどうか、それは、たれも知っているものがない。阿<sup>あ</sup>

濃こぞ自身も、この事だけは、全く口をつぐんでいる。たとえ盗人たちが、意地悪く子の親を問いつめても、彼女は両手を胸に組んだまま、はずかしそうに目を伏せて、いよいよ執しゅう拗ねく黙まっげつてしまう。そういう時は、必ず垢あかじみた彼女の顔に女らしい血の色がさして、いつか睫毛まつげにも、涙がたまつて来る。盗人たちは、それを見ると、ますます何かとはやし立てて、腹の子の親さえ知らない、阿呆あほうな彼女をあざわらった。が、阿濃は胎児が次郎の子だという事を、かたく心の中で信じている。そうして、自分の恋している次郎の子が、自分の腹にやどるのは、当然な事だと信じている。この楼の上で、ひとりさびしく寝るごとに、必ず夢に見るあの次郎が、親でなかったとしたならば、たれがこの子の親であろう。——阿濃は、この時、歌をうたいながら、遠い所を見るような目をして、蚊に刺されるのも知らずに、うつつながら夢を見た。人間の苦しみを忘れた、しかもまた人間の苦しみに色づけられた、うつくしく、いたましい夢である。（涙を知らないものの見る事ができる夢ではない。）そこでは、いつさいの悪が、眼底を払って、消えてしまう。が、人間の悲しみだけは、——空をみたしている月の光のように、大きな人間の悲しみだけは、やはりさびしくおごそかに残っている。……

なよや、末の松山

波も越えなむや

波も越えなむ

歌の声は、ともし火の光のように、次第に細りながら消えていった。そうして、それと共に、力のない呻しんぎん吟の聲が、暗やみを誘うごとく、かすかにもれ始めた。阿濃あこぎは、歌の半ばで、突然下腹に、鋭い疼痛とうつうを感じ出したのである。

相手の用意に裏をかかれた盗人の群れは、裏門を襲った一隊も、防ぎ矢に射しまされたのを始めとして、中門ちゅうもんを打って出た侍たちに、やはり手痛い逆撃さかうをくらわせられた。たかが青侍の腕だとは思ひ侮おそつていた先手の何人かも、算を乱しながら、背そびらを見せる——中でも、臆病おくびょうな猪熊いのくまの爺おじは、たれよりも先に逃げかけたが、どうした拍子か、方角を誤まちつて、太刀をぬきつれた侍たちのただ中へ、はいるともなく、はいってしまった。酒肥さかぶとりした体格と言ひ、物々しく鈍ほこをひっさげた様子と言ひ、ひとかど手なみのすぐれたものと、思われでもしたのであろう。侍たちは、彼を見ると、互いに目くばせをかわし

ながら、二人三人、鋒きつさきをそろえたまま、じりじり前後から、つめよせて来た。

「はやるまいぞ。わしはこの殿けにんの家人じゃ。」

猪熊いのくまの爺おじは、苦しまぎれにあわただしく叫んだ。

「うそをつけ。——おのれにたばかれるような阿呆あほうと思うか。——往生ぎわの悪いおやじじゃ。」

侍たちは、口々にののしりながら、早くも太刀たちを打ちかけようとする。もうこうなつては、逃げようとしても逃げられない。猪熊の爺の顔は、とうとう死人しびとのような色になった。

「何がうそじゃ。何がうそじゃよ。」

彼は、目を大きくして、あたりをしきりに見回しながら、逃げ場はないかと気をあせつた。額には、つめたい汗がわいて来る。手もふるえが止まらない。が、周囲は、どこを見ても、むごたらしい生死の争いが、盗人と侍との間に戦われているばかり、静かな月の下ではあるが、はげしい太刀音たちおとと叫喚の声とが、一塊ひとかたまりになつた敵味方の中から、ひっきりなしにあがつて来る。——しよせん逃げられないときとつた彼は、目を相手の上にすえると、たちまち別人のように、凶悪なけしきになつて、上下じょうげの齒をむき出しながら、すばやく鉾ほこをかまえて、威丈高いたけだかにののしつた。



「うそをついたがどうしたのじや。阿呆あほう。外道げど。畜生ちくしょう。さあ来い。」

こう言うことばと共に、鉾ほこの先からは、火花が飛んだ。中でも屈くつきよう 竟はな、赤あざのある侍が一人、衆に先んじてかたわらから、無二無三に切つてかかったのである。が、もとより年をとった彼が、この侍の相手になるわけではない。まだ十じゅうごう 合はと刃を合わせないうちに、見る見る、鉾ほこ 先さきがしどろになつて、次第にあとへ下がってゆく。それがやがて小路のまん中まで、切り立てられて来たかと思うと、相手は、大きな声を出して、彼が持つていた鉾ほこの柄えを、みごとに半ばから、切り折つた。と、また一太刀ひとたち、今度は、右の肩先から胸へかけて、袈裟けさがけに浴びせかける。猪熊いのくまの爺おじは、尻居しりいに倒れて、とび出しそうに大きく目を見ひらいたが、急に恐怖と苦痛とに堪えられなくなつたのであろう、あわてて高たか這はいに這いのきながら声をふるわせて、わめき立てた。

「だまし討ちじや。だまし討ちを、食らわせおつた。助けてくれ。だまし討ちじや。」

赤あざの侍は、その後ろからまた、のび上がつて、血に染んだ太刀たちをふりかざした。その時もし、どこからか猿さるのようなものが、走つて来て、帷子かたびらの裾すそを月にひるがえしながら、彼らの中へとびこまなかつたとしたならば、猪熊いのくまの爺おじは、すでに、あえない最後を遂げていたのに相違ない。が、その猿さるのようなものは、彼と相手との間を押しへだてると、

とつさに小刀<sup>さす</sup>をひらめかして、相手の乳の下へ刺し通した。そうして、それとともに、相手の横に払った太刀<sup>たち</sup>をあびて、恐ろしい叫び声を出しながら、焼け火箸<sup>ひばし</sup>でも踏んだように、勢いよくとび上がると、そのまま、向こうの顔へしがみついて、二人いっしょにどうと倒れた。

それから、二人の間には、ほとんど人間とは思われない、猛烈なつかみ合いが、始まった。打つ。噛<sup>か</sup>む。髪をむしる。しばらくは、どちらがどちらともわからなかったが、やがて、猿のようなものが、上になると、再び小刀<sup>さす</sup>がきらりと光って、組みしかれた男の顔は、痣<sup>あざ</sup>だけ元のように赤く残しながら、見ているうちに、色が変わった。すると、相手もそのまま、力が抜けたのか、侍の上へ折り重なって、仰向けにぐたりとなる——その時、始めて月の光にぬれながら、息も絶え絶えにあえいでいる、しわだらけの、墓<sup>ひき</sup>に似た、猪熊のばばの顔が見えた。

老婆は、肩で息をしながら、侍の死体の上に横たわって、まだ相手の髻<sup>もとどり</sup>をとらえた、左の手もゆるめずに、しばらくは苦しそうな呻<sup>しんげん</sup>吟の声をつづけていたが、やがて白い目を、ぎよろりと一つ動かすと、干<sup>ひ</sup>からびたくちびるを、二三度無理に動かして、

「おじいさん。おじいさん。」と、かすかに、しかもなつかしそうに、自分の夫を呼びか

けた。が、たれもこれに答えるものはない。猪熊いのくまの爺おじは、老女の救いを得ると共に、打ち物も何も投げすてて、こけつまろびつ、血にすべりながら、いち早くどこかへ逃げてしまった。そのあとにももちろん、何人かの盗人たちは、小路こうじのそここに、得物えものをふるつて、必死の戦いをつづけている。が、それらは皆、この垂死の老婆にとって、相手の侍と同じような、行路の人に過ぎないのであろう。——猪熊のばばは、次第に細ってゆく声で、何度となく、夫の名を呼んだ。そうして、そのたびに、答えられないさびしさを、負うている傷の痛みよりも、より鋭く味わされた。しかも、刻々衰えて行く視力には、次第に周囲の光景が、ぼんやりとかすんで来る。ただ、自分の上にひろがっている大きな夜の空と、その中にかかっている小さな白い月と、それよりほかのものは、何一つはつきりとわからない。

「おじいさん。」

老婆は、血の交じった唾つばを、口の中にためながら、ささやくようにこう言う、それなり恍惚こうこつとした、失神の底に、——おそらくは、さめる時のない眠りの底に、昏昏こんこんとして沈んで行った。

その時である。太郎は、そこを栗毛くりげの裸馬にまたがって、血にまみれた太刀たちを、口にく

わえながら、両の手に手綱たづなをとつて、あらしのように通りすぎた。馬は言うまでもなく、沙金しゃきんが目をつけた、陸奥出みちのくでの三才駒さんさいこまであろう。すでに、盗人たちがちりぢりに、死しびとを残して引き揚げた小路は、月に照らされて、さながら霜を置いたようにうす白い。彼は、乱れた髪を微風に吹かせながら、馬上に頭こうべをめぐらして、後しりえにのしり騒ぐ人々の群れを、誇らかにながめやった。

それも無理はない。彼は、味方の破れるのを見ると、よしや何物を得なくとも、この馬だけは奪おうと、かたく心に決したのである。そうして、その決心どおり、葛巻つづらまきの太刀たちをふるいふるい、手に立つ侍を切り払つて、單身門の中に踏みこむと、苦もなく厩うまやの戸を蹴破けやぶつて、この馬の羈綱はづなを切るより早く、背に飛びのる間まも惜しいように、さえぎるものをひづめにかけて、いつさんに宙を飛ばした。そのために受けた傷も、もとより数えるいとまはない。水干すいかんの袖そではちぎれ、烏帽子えぼしはむなしく紐ひもをとどめて、ずたずたに裂かれた袴はかまも、なまぐさい血潮に染まつている。が、それも、太刀と鉾ほことの林の中から、一人に会えば一人を切り、二人に会えば二人を切つて、出て来た時の事を思えば、うれしくこそあれ、惜しくはない。——彼は、後ろを見返り見返り、晴れ晴れした微笑を、口角に漂わせながら、昂然こうぜんとして、馬を駆つた。

彼の念頭には、沙金がある。と同時にまた、次郎もある。彼は、みずから欺く弱さをしかりながら、しかもなお沙金しゃきんの心が再び彼に傾く日を、夢のように胸に描いた。自分できなかったなら、たれがこの馬をこの場合、奪う事ができるだろう。向こうには、人の和があった。しかも地の利さえ占めている。もし次郎だったとしたならば——彼の想像には、一瞬の間あいだ、侍たちの太刀たちの下に、切り伏せられている弟の姿が、浮かんだ。これは、もちろん、彼にとつて、少しも不快な想像ではない。いやむしろ彼の中にあるある物は、その事実である事を、祈りさえした。自分の手を下さずに、次郎を殺す事ができるなら、それはひとり彼の良心を苦しめずにすむばかりではない。結果から言えば、沙金がそのために、自分を憎む恐れもなくなってしまう。そう思いながらも、彼は、さすがに自分の卑怯ひきようを恥じた。そうして口にくわえた太刀を、右手めでにとつて、おもむろに血をぬぐった。

そのぬぐった太刀を、ちょうど鞆さやにおさめた時である。おりから辻つじを曲がった彼は、行く手の月の中に、二十と言わず三十と言わず、群がる犬の数を尽くして、びようびようとはえ立てる声を聞いた。しかも、その中にただ一人、太刀をかざした人の姿が、くずれかかった築土つじを背負つて、おぼろげながら黒く見える。と思う間にま、馬は、高くいななきながら、長い鬣たてがみをさつと振るうと、四つの蹄ひづめに砂煙をまき上げて、またたく暇に太郎をそこ

へ疾風のように持つて行つた。

「次郎か。」

太郎は、我を忘れて、叫びながら、險しく眉まゆをひそめて、弟を見た。次郎も片手に太刀たちをかざしながら、項うなじをそらせて、兄を見た。そうして刹那せつなに二人とも、相手の瞳ひとみの奥にひそんでいる、恐ろしいものを感じ合つた。が、それは、文字どおり刹那である。馬は、吠ほえたける犬の群れに、脅かされたせいであろう、首を空ぎまに上とあげると、前足で大きな輪をかきながら、前よりもすみやかに、空へ跳おどつた。あとには、ただ、濛々もうもうとしたほこりが、夜空に白く、ひとしきり柱になつて、舞い上がる。次郎は、依然として、野犬の群れの中に、傷をこうむつたまま、立ちすくんだ。……

太郎は——一時に、色を失つた太郎の顔には、もうさつきの微笑の影はない。彼の心の中では、何ものかが、「走れ、走れ」とささやいている。ただ、一時いつとき、ただ、半時はんとき、走りさえすれば、それで万事が休してしまう。彼のする事を、いつかなくてはならない事を、犬が代わつてしてくれるのである。

「走れ、なぜ走らない？」ささやきは、耳を離れない。そうだ。どうせいつかしくはならない事である。おそいと早いとの相違がなんであろう。もし弟と自分の位置を換えた

にしても、やはり弟は自分のしようとする事をするに違いない。「走れ。羅生門らしやうもんは遠くはない。」太郎は、片目に熱を病んだような光を帯びて、半ば無意識に、馬の腹を蹴けった。馬は、尾と鬣たてがみとを、長く風になびかせながら、ひづめに火花を散らして、まっしぐらに狂奔する。一町二町月明かりの小路は、太郎の足の下で、急湍きゆうたんのように後ろへ流れた。

するとたちまちまた、彼のくちびるについて、なつかしいことばが、あふれて来た。

「弟」である。肉身の、忘れる事のできない「弟」である。太郎は、かたく手綱たづなを握ったまま、血相を変えて齒がみをした。このことばの前には、いっさいの分別が眼底を払って、消えてしまう。弟か沙金しゃきんかの、選択をしいられたわけではない。直下じきげにこのことばが電光のごとく彼の心を打ったのである。彼は空も見なかった。道も見なかった。月はなおさら目にはいらなかった。ただ見たのは、限らない夜である。夜に似た愛憎の深みである。太郎は、狂気のごとく、弟の名を口外に投げると、身をのけざまに翻して、片手の手綱たづなを、ぐいと引いた。見る見る、馬の頭かしらが、向きを変える。と、また雪のような泡あわが、栗毛くりげの口にあふれて、蹄ひづめは、砕けよとばかり、大地を打った。——一瞬ののち、太郎は、惨として暗くなつた顔に、片目を火のごとくかがやかせながら、再び、もと来たほうへまっしぐらに汗馬かんばを跳おとらせていたのである。

「次郎。」

近づくまに、彼はこう叫んだ。心の中に吹きささぶ感情のあらしが、このことばを機会として、一時に外へあふれたのであろう。その声は、白<sup>はく</sup>燃<sup>ねん</sup>鉄<sup>てつ</sup>を打つような響きを帯びて、鋭く次郎の耳を貫ぬいた。

次郎は、きつと馬上の兄を見た。それは日ごろ見る兄ではない。いや、今しがた馬を飛ばせて、いっさんに走り去った兄とさえ、変わっている。険しくせまった眉<sup>まゆ</sup>に、かたく、下くちびるをかんだ齒に、そうしてまた、怪しく熱している片目に、次郎は、ほとんど憎悪に近い愛が、——今まで知らなかった、不思議な愛が燃え立っているのを見たのである。

「早く乗れ。次郎。」

太郎は、群がる犬の中に、隕<sup>いん</sup>石<sup>せき</sup>のような勢いで、馬を乗り入れると、小路を斜めに輪乗りをしながら、叱咤<sup>しった</sup>するような声で、こう言った。もとより躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>躊躇<sup>ちよ</sup>に、時を移すべき場合ではない。次郎は、やにわに持っていた太刀<sup>たち</sup>を、できるだけ遠くへほうり投げると、そのあとを追つて、頭をめぐらす野犬のすきをうかがつて、身軽く馬の平首へおどりついた。太郎もまたその刹<sup>せつ</sup>那<sup>な</sup>に猿臂<sup>えんび</sup>をのぼし、弟の襟<sup>えり</sup>上<sup>がみ</sup>をつかみながら、必死になつて引きずり上げる。——馬の頭<sup>かしら</sup>が、鬣<sup>たてがみ</sup>に月の光を払つて、三たび向きを変えた時、次郎はすでに



馬背にあつて、ひと兄の胸をいだいていた。

と、たちまち一頭、血みどろの口をした黒犬が、すさまじくうなりながら、砂を巻いて鞍壺へ飛びあがつた。とがつた牙が、危うく次郎のひざへかかる。そのとたんに、太郎は、足をあげて、したたか栗毛の腹を蹴った。馬は、一声いなきながら、早くも尾を宙に振るう。——その尾の先をかすめながら、犬は、むなしく次郎の脛布を食いちぎって、うずまく獣の波の中へ、まっさかさまに落ちて行つた。

が、次郎は、それをうつくしい夢のように、うつとりした目でながめていた。彼の目には、天も見えなければ、地も見えない。ただ、彼をいだいている兄の顔が、——半面に月の光をあびて、じつと行く手を見つめている兄の顔が、やさしく、おごそかに映っている。彼は、限らない安息が、おもむろに心を満たして来るのを感じた。母のひざを離れてから、何年にも感じた事のない、静かな、しかも力強い安息である。——

「にいさん。」

馬上にある事も忘れたように、次郎はその時、しかと兄をいだと、うれしそうに微笑しながら、頬を紺の水干の胸にあてて、はらはらと涙を落としたのである。

半時のち、人通りのない朱雀の大路を、二人は静かに馬を進めて行つた。兄も黙つ

ていれば、弟も口をきかない。しんとした夜は、ただ馬蹄ばていの響きにこだまをかえして、二人の上の空には涼しい天の川がかかっている。

八

羅生門らしやもんの夜は、まだ明けない。下から見ると、つめたく露を置いた藁いらかや、丹塗にぬりのはげた欄干に、傾きかかった月の光が、いざよいながら、残っている。が、その門の下は、斜めにつき出した高い檐のきに、月も風もさえぎられて、むし暑い暗がり、絶えまなく藪蚊やぶかに刺されながら、酸すえたようによどんでいる。藤判官とうほうがんの屋敷から、引き揚げてきた偷ちゆう盜とうの一群は、そのやみの中にかすかな松明たいまつの火をめぐりながら、三々五々、あるいは立ちあるいは伏し、あるいは丸柱の根がたにうずくまって、さっきから、それぞれけの手当てに忙しい。

中でも、いちばん重手おもてを負ったのは、猪熊いのくまの爺おじである。彼は、沙金しゃきんの古い桂うちぎを敷いた上に、あおむけに横たわって、半ば目をつぶりながら、時々ものにおびえるように、しわがれた声で、うめいている。一時の間ひとときあいだ、ここにこうしているのか、それとも一年も前か

ら同じように寝ているのか、彼の困憊こんぱいした心には、それさえ時々はわからない。目の前には、さまざまな幻が、瀕死ひんしの彼をあざけるように、ひっきりなく往来そらいすると、その幻と、現在門の下で起こっている出来事とが、彼にとつては、いつか全く同一な世界になつてしまふ。彼は、時と所とを分らない、昏迷こんめいの底に、その醜い一生を、正確に、しかも理性を超越したある順序で、まざまざと再び、生活した。

「やい、おばば、おばばはどうした。おばば。」

彼は、暗やみから生まれて、暗やみへ消えてゆく恐ろしい幻に脅かされて、身をもだえながら、こううなつた。すると、かたわらから額の傷を汗衫かきみの袖そでで包んだ、交野かたのの平六が顔を出して、

「おばばか。おばばはもう十万億土へ行つてしもうた。おおかた蓮はちすの上でな、おぬしの来るのを、待ち焦がれている事じやろう。」

言いすてて、自分の冗談を、自分でからからと笑いながら、向こうのすみに、真木島まきのしまの十郎の腿もものけがの手当をしている、沙金しゃきんのほうをふり返つて、声をかけた。

「お頭かしら、おじじはちとむずかしいようじや。苦しめるだけ、殺生せつしょうじやて。わしがとどめを刺してやろうかと思うがな。」

沙金は、あでやかな声で、笑った。

「冗談じゃないよ。どうせ死ぬものなら、自然に死なしておやりな。」

「なるほどな、それもそうじゃ。」

猪熊いのくまの爺おじは、この問答を聞くと、ある予期と恐怖とに襲われて、からだじゅうが一時に凍るような心もちがした。そうして、また大きな声でうなった。平六と同じような理由で、敵には臆おくびよう病びような彼も、今までに何度、致死期ちしごの仲間の者をその鋒ほこの先で、とどめを刺したかわからない。それも多くは、人を殺すという、ただそれだけの興味から、あるいは自分の勇気を人にも自分にも示そうとする、ただそれだけの目的から、進んでこの無残なしわざをあえてした。それが今は――

と、たれか、彼の苦しみも知らないように、灯ひの陰で一人、鼻歌をうたう者がある。

いちち笛ふき

猿さるかなず

いなごまろは拍子うつ

きりぎりす

びしやりと、蚊をたたく音が、それに次いで聞こえる。中には「ほう、やれ」と拍子を

とつたものもあつた。二三人が、肩をゆすつたけはいで、息のつまつたような笑い声を立てる。――猪熊いのくまの爺おじは、総身そうみをわなわなふるわせながら、まだ生きているという事実を確かめたいために、重い睨まぶたを開いて、じつともし火の光を見た。灯ともしは、その炎のまわりに無数の輪をかけながら、執拗しゆうねい夜に攻められて、心細い光を放っている。と、小さな黄金虫こがねむしが一匹ぶうんと音を立てて、飛んで来て、その光の輪にはいったかと思うとたちまち羽根を焼かれて、下へ落ちた。青臭いにおいが、ひとしきり鼻を打つ。

あの虫のように、自分もほどなく死ななければならない。死ねば、どうせ蛆うじと蠅はえに、血も肉も食いつくされるからだである。ああこの自分が死ぬ。それを、仲間のものは、歌をうたつたり笑つたりしながら、何事もないように騒いでいる。そう思うと、猪熊いのくまの爺おじは、名状しがたい怒りと苦痛とに、骨髓をかまれるような心もちがした。そうして、それとともに、なんだか轆轤ろくろのようにとめどなく回っている物が、火花を飛ばしながら目の前へおりて来るような心もちがした。

「畜生。人でなし。太郎。やい。極道ごくどう。」

まわらない舌の先から、おのずからこういうことばが、とぎれとぎれに落ちて来る。――真木島まきのしまの十郎は、腿ももの傷が痛まないように、そつとねがえりをうちながら、喉のどのかわ

いたような声で、沙金しゃきんにささやいた。

「太郎さんは、よくよく憎まれたものさな。」

沙金しゃきんは、眉まゆをひそめながら、ちよいと猪熊いのくまの爺おじのほうを見て、うなずいた。すると鼻歌をうたつたのと同じ声で、

「太郎さんはどうした。」とたずねたものがある。

「まず助かるまいな。」

「死んだのを見たと言ったのは、たれじや。」

「わしは、五六人を相手に切り合っているのを見た。」

「やれやれ、頓生とんしょう菩提ぼだい、頓生菩提。」

「次郎さんも、見えないぞ。」

「これも事によると、同じくじや。」

太郎も死んだ。おばばも、もう生きてはいない。自分も、すぐに死ぬであろう。死ぬ。

死ぬとは、なんだ。なんにしても、自分は死にたくない。が、死ぬ。虫のように、なんの造作ぞうさくもなく死んでしまう。——こんな取りとめのない考えが、暗やみの中に鳴いている藪蚊やぶかのように、四方八方から、意地悪く心を刺して来る。猪熊の爺は、形のない、気味の悪い

「死」が、しんぼうづよく、丹塗<sup>にぬ</sup>りの柱の向こうに、じつと自分の息をうかがっているのを感じた。残酷に、しかもまた落ち着いて、自分の苦痛をながめているのを感じた。そうして、それが少しずつ居ざりながら、消えてゆく月の光のように、次第にまくらもとへすりよつて来るのを感じた。なんにしても、自分は死にたくない。――

夜はたれとか寝<sup>いね</sup>む

常陸<sup>ひたち</sup>の介<sup>すけ</sup>と寝<sup>いね</sup>む

寝<sup>いね</sup>たる肌<sup>はだ</sup>もよし

男山の峰のもみじ葉

さぞ名はたつや

また、鼻歌の聲が、油しめ木の音<sup>ぎ</sup>のような呻<sup>しんげん</sup>吟の聲と一つになった。とたれか、猪<sup>いのく</sup>の熊<sup>ま</sup>の爺<sup>おじ</sup>の枕<sup>まくら</sup>もとで、つばをはきながら、こう言つたものがある。

「阿濃<sup>あこぎ</sup>のあほうが見えぬの。」

「なるほど、そうじゃ。」

「おおかた、この上に寝ておろう。」

「や、上で猫<sup>ねこ</sup>が鳴くぞ。」

みな、一時にひっそりとなった。その中を、絶え絶えにつづく猪熊いのくまの爺おじのうなり声と一つになって、かすかに猫の声が聞こえて来る。と流れ風が、始めてなま暖かく、柱の間を吹いて、うす甘い凌霄花のうぜんかずらのにおいが、どこからかそつと一同の鼻を襲った。

「猫も化けるそうな。」

「阿濃あこぎの相手には、猫の化けた、老いぼれが相当じゃよ。」

すると、沙金しゃきんが、衣きぬずれの音をさせて、たしなめるように、こう言った。

「猫じゃないよ。ちよつとたれか行つて、見て来ておくれ。」

声に応じて、交野かたのの平六が、太刀たちの鞘さやを、柱にぶつつけながら、立ち上がった。楼上に通う梯子はしこは、二十いくつの段をきぎんで、その柱の向こうにかかっている。——一同は、理由のない不安に襲われて、しばらくはたれも口をとぎしてしまった。その間をただ、凌霄花のにおいのする風が、またしてもかすかに、通りぬけると、たちまち楼上で平六の、何か、わめく声がした。そうして、ほどなく急いで梯子をおりて来る足音が、あわただしく、重苦しい暗やみをかき乱した。——ただ事ではない。

「どうじゃ。阿濃あこぎめが、子を産みおったわ。」

平六は、梯子はしこをおりると、古被衣ふるかぎにくるんだ、丸々としたものを、勢いよくともし火



の下へ出して見せた。女の臭いにおのする、うすよごれた布の中には、生まれたばかりの赤ん坊が、人間というよりは、むしろ皮をむいた蛙かえるのように、大きな頭を重そうに動かしながら、醜い顔をしかめて、泣き立てている。うすい産毛うぶげといい、細い手の指と言いい、何一つ、嫌悪けんおと好奇心とを、同時にそらないものはない。——平六は、左右を見まわしながら、抱いている赤子を、ふり動かして、得意らしく、しゃべり立てた。

「上へ上がつて見ると、阿濃め、窓の下へつつ伏したなり、死んだようになって、うなつていると、阿呆あほうとはいえ、女の部じや。癪しゃくかと思うて、そばへ行くと、いや驚くまい事かさかなの腸はらわたをぶちまけたようなものが、うす暗い中で、泣いているわ。手をやると、それがぴくりと動いた。毛のないところを見れば、猫ねこでもあるまい。じゃてひつつかんで、月明かりにかざして見ると、このとおり生まれたばかりの赤子じや。見い。蚊に食われたと見えて、胸も腹も赤まだらになつてゐるわ。阿濃も、これからはおふくろじやよ。」

松明たいまつの火を前に立つた、平六のまわりを囲んで、十五六人の盗人は、立つものは立ち、伏すものは伏して、いずれも皆、首をのぼしながら、別人のように、やさしい微笑を含んで、この命が宿つたばかりの、赤い、醜い肉塊を見守つた。赤ん坊は、しばらくも、じつとしていない。手を動かす。足を動かす。しまいには、頭を後ろへそらせて、ひとしきり

また、けたたましく泣き立てた。と、齒のない口の中が見える。

「やあ舌がある。」

前に鼻歌をうたった男が、頓<sup>とんきよう</sup> 狂な声で、こう言った。それにつれて、一同が、傷も

忘れたように、どっと笑う。——その笑い声のあとを追いかけるように、この時、突然、

猪熊<sup>いのくま</sup>の爺<sup>おじ</sup>が、どこにそれだけの力が残っていたかと思うような声で、険しく一同の後ろ

から、声をかけた。

「その子を見せてくれ。よ。その子を。見せないか。やい、極道<sup>ごくどう</sup>。」

平六は、足で彼の頭をこづいた。そうして、おどかすような調子で、こう言った。

「見たければ、見るさ。極道とは、おぬしの事じゃ。」

猪熊の爺は、濁った目を大きく見開いて、平六が身をかがめながら、無造作につきつけ

た赤ん坊を、食いつきそうな様子をして、じっと見た。見ているうちに、顔の色が、次第

に蠟<sup>ろう</sup>のごとく青ざめて、しわだらけの眦<sup>まなじり</sup>に、涙が玉になりながら、たまつて来る。と思う

と、ふるえるくちびるのほとりには、不思議な微笑の波が漂つて、今までにない無邪気な

表情が、いつか顔じゅうの筋肉を柔らげた。しかも、饒舌<sup>じょうぜつ</sup>な彼が、そうなったまま、

口をきかない。一同は、「死」がついに、この老人を捕えたのを知った。しかし彼の微笑

の意味はたれも知っているものがない。

猪熊いのくまの爺おじは、寝たまま、おもむろに手をのべて、そつと赤ん坊の指に触れた。と、赤ん坊は、針にでも刺されたように、たちまちいたいたい泣き声を上げる。平六は、彼をしかろうとして、そうしてまた、やめた。老人の顔が——血のけを失った、この酒肥さかぶとりの老人の顔が、その時ばかりは、平生とちがった、犯しがたいいかめしさに、かがやいているような気がしたからである。その前には、沙金しゃきんでさえ、あたかも何物かを待ち受けるように、息を凝らしながら、養父の顔を、——そうしてまた情人おとこの顔を、目もはなさず見つめている。が、彼はまだ、口を開かない。ただ、彼の顔には、秘密な喜びが、おりから吹きだした明け近い風のように、静かに、こちよく、あふれて来る。彼は、この時、暗い夜の向こうに、——人間の目のとどかない、遠くの空に、さびしく、冷ややかに明けてゆく、不滅な、黎明れいめいを見たのである。

「この子は——この子は、わしの子じや。」

彼は、はつきりこう言つて、それから、もう一度赤ん坊の指にふれると、その手が力なく、落ちそうになる。——それを、沙金しゃきんが、かたわらからそつとささえた。十余人の盗人たちは、このことばを聞かないように、いずれも唾つをのんで、身動きもしない。と、沙

金が顔を上げて、赤子を抱いたまま、立っている交野かたのの平六の顔を見て、うなずいた。

「啖たんがつまる音じゃ。」

平六は、たれに言うともなく、つぶやいた。——猪熊いのくまの爺おじは、暗やみにおびえて泣く赤子の声の中に、かすかな苦悶くもんをつづけながら、消えかかる松明たいまつの火のように、静かに息をひきとつたのである。……

「爺おじも、とうとう死んだの。」

「さればさ。阿濃あこぎを手ごめにした主ぬしも、これで知れたと言うものじゃ。」

「死骸しかいは、あの藪やぶ中へ埋めずばなるまい。」

「鴉からすの餌食えしきにするのも、気の毒じやな。」

盗人たちは、口々にこんな事を、うす寒そうに、話し合つた。と、遠くで、かすかに、鶏の声がする。いつか夜の明けるのも、近づいたらしい。

「阿濃は？」と沙金が言つた。

「わしが、あり合わせの衣きぬをかけて、寝かせて来た。あのからだじやて、大事はあるまい。」

平六の答えも、日ごろに似ずものやさしい。

そのうちに、盗人が二人三人、猪熊いのくまの爺おじの死骸しがいを、門の外へ運び出した。外も、まだ暗い。有明ありあけの月のうすい光に、蕭条しょうじょうとした藪やぶが、かすかにこずえをそよめかせて、凌霄花のうぜんかずらのにおいが、いよいよ濃く、甘く漂っている。時々かすかな音のするのは、竹の葉をすべる露であろう。

「生死事大。  
しょうじじだい。」

「無常迅速。」

「生き顔より、死に顔のほうがよいようじやな。」

「どうやら、前よりも真人間らしい顔になった。」

猪熊の爺の死骸は、斑々はんぱんたる血痕けっこんに染まりながら、こういうことばのうちに、竹と凌霄花との茂みを、次第に奥深く昇かかれて行つた。

## 九

翌日、猪熊のある家で、むごたらしく殺された女の死骸が発見された。年の若い、肥ふとつた、うつくしい女で、傷の様子では、よほどはげしく抵抗したものらしい。証拠ともなる

べきものは、その死骸が口にくわえていた、朽ち葉色の水干の袖ばかりである。

また、不思議な事には、その家の婢女をしていた阿濃という女は、同じ所にいながら、薄手一つ負わなかった。この女が、検非違使庁で、調べられたところによると、だいたいこんな事があつたらしい。だいたいと言うのは、阿濃が天性白痴に近いところから、それ以上要領を得る事が、むずかしかったからである。――

その夜、阿濃は、夜ふけて、ふと目をさますと、太郎次郎という兄弟のものと、沙金とが、何か声高に争っている。どうしたのかと思つているうちに、次郎が、いきなり太刀をぬいて、沙金を切つた。沙金は助けを呼びながら、逃げようとする、今度は太郎が、刃を加えたらしい。それからしばらくは、ただ、二人ののしる声と、沙金の苦しむ声とがつづいたが、やがて女の息がとまると、兄弟は、急にいだきあつて、長い間黙つて、泣いていた。阿濃は、これを遣り戸のすきまから、のぞいていたが、主人を救わなかったのは、全く抱いて寝ている子供に、けがをさすまいと思つたからである。――

「その上、その次郎さんと申しますのが、この子の親なのでございます。」

阿濃は、急に顔を赤らめて、こう言つた。

「それから、太郎さんと次郎さんとは、わたしの所へ来て、たっしやでいろよと申しまし

た。この子を見せましたら、次郎さんは、笑いながら、頭をなでてくれましたが、それでもまだ目には涙がいつぱいたまっておりますつけ。わたしはもっとそうしていたかったのでござりますが、二人とも、たいへんに急いで、すぐに外へ出ますと、おおかた枇杷の木にでもつないでおいたのでございましょう、馬へとびのつて、どこかへ行つてしまいました。馬は二匹ではございません。わたしが、この子を抱いて、窓から見ておりますと、一匹に二人で乗つて行くのが、月がございましたから、よく見えました。そのあとで、わたしは、主人の死骸はそのままして、そつとまた床へはいりました。主人がよく人を殺すのを見ましたから、その死骸もわたしには、こわくもなんともなかったのでございます。

「<sup>一</sup>検非違使には、やつとこれだけの事がわかった。そうして、阿濃は、罪の無いのが明らかになったので、さつそく自由の身にされた。」

それから、十年余りのち、尼になって、子供を養育していた阿濃は、丹後守何某の随身に、驍勇きょうゆうの名の高い男の通るのを見て、あれが太郎だと人に教えた事がある。なるほどその男も、うす痘瘡いもで、しかも片目つぶれていた。

「次郎さんなら、わたしすぐにも駆けて行つて、会うのだけれど、あの人はこわいから……」

…

阿濃<sup>あこぎ</sup>は、娘のようなしなをして、こう言った。が、それがほんとうに太郎かどうか、それはたれにも、わからない。ただ、その男にも弟があつて、やはり同じ主人に仕えるという事だけ、そののちかすかに風聞された。

(大正六年四月二十日)



## 青空文庫情報

底本：「羅生門・鼻・芋粥・偷盜」岩波文庫、岩波書店

1960（昭和35）年11月25日第1刷発行

1993（平成5）年9月20日第46刷発行

底本の親本：「芥川竜之介全集」岩波書店

1954（昭和29）年～1955（昭和30）年

初出：「中央公論」

1917（大正6）年4、7月

入力：福田芽久美

校正：野口英司

1998年10月4日公開

2007年9月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 偷盗

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>